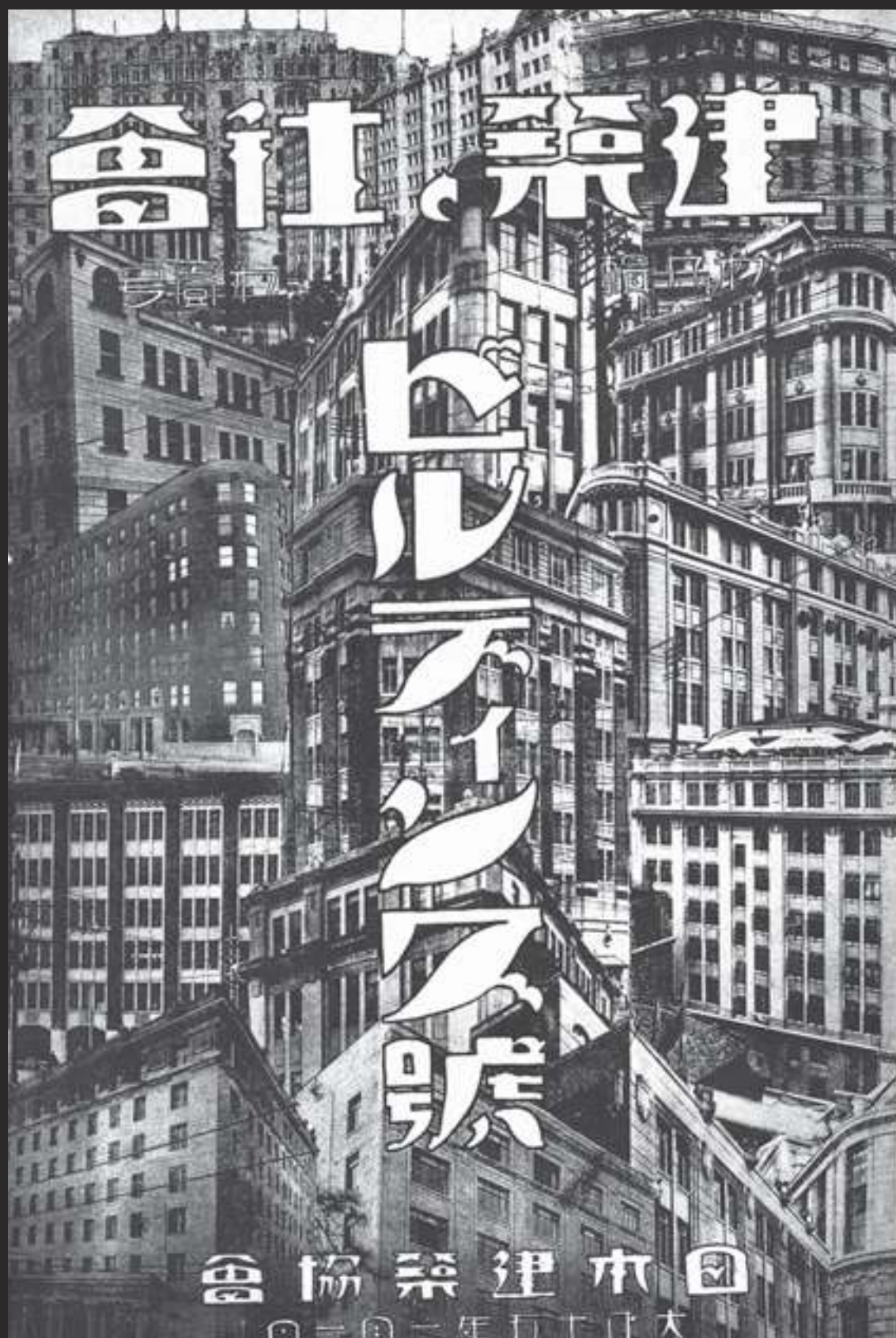




歴代の会誌表紙 Vol.9 <1月号のみ特別表紙>

特集 働き方と価値：
社会に繋がる多様なワークスタイル

2018 04
Vol.99 No.1153

建築と社会

Architecture and Society

日本建築協会

主催 日本建築協会

平成30年度 第64回工高生デザインコンクール

設計課題 みんなの「こども食堂」

課題の趣旨

こども食堂は子どもやその親、および地域の人々に対し、無料または安価で栄養のある食事や団らんを提供するための社会活動の場です。

こども食堂を利用する対象者は様々で、一緒に食べる家族がいない「孤食」、いつも同じものを食べる「個食」、一種類しか食べ物が無い「固食」等、これらの「こしょく」や食事を抜きがちな「欠食」を解消するための活動が大きな機能のひとつであると考えられます。



こども食堂の歴史はあまり長くはありません。地域で見かけることも少ないかもしれません。しかし徐々にその数は増えています。

こども食堂は、子どもたちだけでなく地域とのつながりを生む場となるかもしれません。あなたが考える空間で暖かいごはんとながりを提供する、新たなみんなの「こども食堂」をオープンさせてください。

設計条件

1. 敷地：敷地の大きさ形状とも自由とし、具体的な敷地を設定する。
2. 規模：延べ面積、構造、階数は自由とする。
3. 所要室：使用方法を想定し、必要と思われるスペースを適宜設ける。

所要図等

1. 設計説明：設計意図を表すサブタイトルを必ずつけること。設計趣旨（建物の使い方、立地、周囲の状況等についての説明を含む）を記入すること。
2. 建築概要：敷地面積、建築物の構造、階数、各階床面積および建築面積、延べ床面積などを示す。
3. 敷地周辺図：敷地周辺の環境や状況を示す。縮尺を明示する。
4. 配置図：敷地における建物の位置、道路との関係、方位、縮尺を明示する。
5. 平面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。
6. 立面図：縮尺を明示する。（2面以上）
7. 断面図：室名、寸法を記入する。縮尺を明示する。（1面以上）
8. 透視図等：設計意図が最も反映するところを表現する。透視図は手書きによる作図を原則とするが、コンピュータグラフィックス、模型写真に代えてもよい。その他必要とされる手書きの図面は加えてもよい。
9. その他：応募図面には、氏名や学校名、マークなど応募者を特定あるいは類推できる内容は記載しないこと。

応募条件

1. 用紙：用紙はケント紙などの厚手の製図用紙A1判（594mm×841mm）1枚を使用し、直接描くこと。トレーシングペーパーと裏打ち用紙の重ね使用や図面のパネル化は認めない。
2. 仕上げ：所要図等は手書きによる鉛筆仕上げとする。（作図、文字）ただし、色鉛筆による着色は可。また、所要図等のうち、透視図（コンピュータグラフィックスも含む）、模型写真のほか、設計説明を補完する図や写真などは用紙に貼り付けてもよい。なお、製図用紙への図表等の印刷出力など上記以外の仕上げは禁止する。

審査員（50音順・敬称略）

審査員長 大平 滋彦／㈱竹中工務店大阪本店設計部設計第4部長
審査員 一階 聡之／㈱日建設計設計部門設計部長
小笠原 絵理／間工作舎一級建築士事務所主宰
神谷 浩司／㈱大林組大阪本店建築事業部プロジェクト設計部副部長
河崎 昌之／和歌山大学システム工学部環境システム学科准教授

3. 応募資格：平成30年4月現在、高等学校在籍の生徒で、個人または共同（3人まで）で制作したものとする。

応募方法

1. 応募書類に、学校名・所在地・学年・氏名を記入の上、封筒に入れ密封し、製図用紙の裏に貼りつけること。（応募書類が足りない場合は協会ホームページ（<http://www.aaj.or.jp>）からダウンロードしてください。また封筒の貼り付けは、封筒がはがれない程度で結構です。図面を破損する恐れがありますので、糊のベタ塗りはしないでください。）
2. 応募作品は学校を通じて提出すること。

締切期日

平成30年9月30日（日）の消印、あるいは受付印のあるものをもって締め切る。

送付先

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号 OMM7階
一般社団法人 日本建築協会 第64回工高生デザインコンクール係
TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp URL：http://www.aaj.or.jp

入選作品の数および賞

1. 入選作品は10点とする。
2. 入選作品のうちから最優秀賞1点、優秀賞2点を選ぶ。
3. 最優秀賞・優秀賞作品には、賞状および表彰盾を贈り、その他の入選作品には、賞状を贈る。
4. 応募者全員に参加賞を贈る。
※入選作品の著作権は本会に属する。

入選者発表および表彰式

審査の結果は、各学校ならびに本人に通知するほか、本会の会誌「建築と社会」11月号に発表し、入選作品は翌年1月号に掲載する。表彰式は、平成30年11月10日（土）に行う。

このコンクールは、高校生の設計技能の向上を目的とし、昭和30年より毎年テーマを変えて開催しています。

「奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校」見学会

日時
2018年5月16日(水)
14:30~16:30
受付14:00~

見学先 奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力創造国際大学校
所在地 奈良県桜井市池之内130-1

〔この見学会は、建築CPD情報提供
制度認定プログラム申請中です。
(2単位)〕

今回は、大規模木造建築の見学・説明のほか農業研究開発センターのご担当者様にお話をうかがいます。農業についても知見を深められるこの機会にぜひご参加ください。

【概要】

建築主 奈良県
設計・監理 (株)徳岡設計
施工 中尾・中和特定建設工事
共同企業体
敷地面積 98,362㎡
建築面積 6877.18㎡ (合計)
延床面積 7665.36㎡ (合計)
構造規模
本館：RC造一部W造
地上2階
交流・サロン棟：W造 地上2階
現場管理棟：W造 地上1階
教育管理棟：W造 地上1階
農機具庫：S造 地上1階
大資材庫：S造 地上1階
小資材庫：S造 地上1階
竣工 2015~2017年完成

コンセプト

奈良県農業研究開発センターの移転を契機に、研究開発の機能強化と大学校との集約を行い、県農業を支援する拠点施設として再整備。

シンボル施設である交流・サロン棟は、敷地内の古墳と呼応する全方向に正面性をもつ楕円曲面の屋根形状、他建物は周辺圃場への日影の影響が最も少ない寄棟の屋根形状とし、「歴史的風土にふさわしい周辺の緑地や集落に調和する施設整備」を実現。各棟は、メンテナンスバルコニーや廊下天井インフラなど室機能の変更にフレキシブルに対応できるようにし、大庇による建物周囲の中間領域を設け、半屋外での作業を可能とするなど「研究を効率化する質実剛健な各施設」を実現。

内部空間は県農業研究・振興・教育の拠点として、家具、仕上げのみならず大断面集成材による架構や、木格子による透明な展示壁などにも県産木材をふんだんに用いて、「奈良らしく親しみやすい木に包みこまれた空間」を実現。

講師 (株)徳岡設計 ご担当者様
奈良県農業研究開発センター ご担当者様

集合 現地 (参加証に地図記載)
最寄駅 近鉄大阪線・JR万葉まほろば線「桜井」駅から
奈良交通バス「安倍小学校」下車 徒歩5分
桜井市コミュニティバス「生田(おいだ)」下車 徒歩15分

定員 30名 (先着順)
参加費 会員1,000円/一般1,500円
学生500円

申込方法 ①催し名
②氏名 (フリガナ)
③会員・一般・学生の別
④職場名または学校名
⑤住所
⑥当日連絡先電話番号
⑦CPD申請される方は申請先の団体名とID番号

上記を明記しFAXかE-mailまたはホームページにてお申し込みください
申込先：日本建築協会 (担当：内山)
TEL：06-6946-6981
FAX：06-6946-6984
E-mail：jigyoka@aaj.or.jp

※現地の駐車場が利用可能ですので、お車で越しの方はお申し込み時にご連絡ください。



U-35委員会企画 5th action 「建築と未来」

第1回 フューチャーセッション 20年後、幸せに“すまう” ご案内

と き 2018年6月2日(土)
9:45~16:45
と ころ イマジンアンドデザイン
レンタルスペースSalon
アクセス 地下鉄御堂筋線「心斎橋」駅より徒歩5分、
地下鉄堺筋線「長堀橋」駅より徒歩2分、地下鉄長堀鶴見緑地線「長堀橋」駅より徒歩2分
※車でお越しの方は、専用駐車場がございますので、近隣有料駐車場をご利用ください。



■開催詳細

日 時 2018年6月2日(土)
9:45~集合・受付
10:00~セッション
12:30~休憩・昼食
13:30~試作
15:00~発表
16:30~総括
会 場 イマジンアンドデザイン
レンタルスペースSalon
〒542-0081
大阪市中央区南船場2-6-12

セッション参加資格

2018年4月1日時点
40歳以下の方
(学生の方も歓迎です)
※応募多数の場合、定員の
上限を設けさせて頂く場
合があります。

申し込み FAXまたはE-mailで
①催し名
「U35フューチャーセ
ッション」
②氏名(ふりがな)
③年齢
④学校名または職場名
⑤住所、電話番号
⑥学生・個人会員・一般
の種別
⑦メールアドレス(※受
付後、参加証を送付し
ます)
を記載してお送りください。

参加申込締切日
2018年4月30日(月)

申 込 先 日本建築協会(担当:井筒)
TEL 06-6946-6981/FAX 06-6946-6984
E-mail: hensyu@aaj.or.jp

参 加 費 学 生 500円
個 人 会 員 1,000円
上記以外一般 2,000円
※昼食代別途

■「建築と未来」開催主旨 20年後、幸せに“すまう”

20年後の私たちの未来について考え
てみよう。

日本は世界に先駆けて超高齢・人口
縮小社会に突入し、経済成長にも歯
止めがかかっています。

誰も経験したことがないそのような
社会で未来を照らし出すアイデアを
模索するために、20年後の未来を想
定したフューチャーセッション(み
なで討議をする場)を企画します。

20年後、今生まれた子どもたちは成
人し、私たち(U-35世代)は社会の
中でより大きな責任を担う立場とな
ります。シンギュラリティ(人工知
能が人の知能を超える技術的特異点)
の到来やテクノロジーの進化がもた
らす更なる長寿化などによって、
社会は大きく変化し、社会における
建築のあり方も今とは異なるものな
っているかもしれません。

U-35委員会が活動拠点を置く関西は
首都圏に次ぐ日本第二の都市圏であ
りながらも、20年後の人口減少がい
ち早く進むと予測されています。
(20年後の日本の人口減少率14%、東
京都3%、関西14% 出典:内閣府
ほか)

つまり関西をモデルに20年後の未来
を考えることは、日本の未来を考え
るにもつながると言えます。
関西を舞台とし、これからの社会で
“すまう”をつくる担い手となる、建
築設計者を含む分野や世代を超えた
多様な参加者が共に議論することで、
未来に向けた新たな刺激やアイデア
を生み出す協創の場となることを期
待し、フューチャーセッションを開
催します。

セッションの内容や詳細等は、今後、
U-35委員会のfacebookやホームペ
ージで公表しますので、左記アドレ
スにアクセスしてください。

■U-35委員会とは

日本建築協会における「若手設計者
を中心とし業種・組織を超えた同世
代をつなげるプラットフォームの創
出、U-35世代の多角的な視野の獲得、
建築における多様な価値の社会への
発信を活動の目的としています。

■「action」とは

年度毎の活動を総括し、U-35委員会
からの「アウトプット」を広く行
う公開型イベントです。

1st action:「建築と木材」(2013年)
「大阪木材仲買会館」の見学会およ
び3名のパネリストを招いての講演
会・交流会を実施。多数の方にご参
加いただき、大成功をおさめること
ができました。

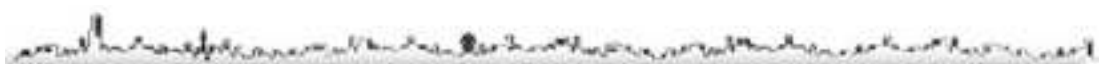
2nd action:「建築と掘場」(2014年)
うめきた再開発のさがけ「グラン
フロント大阪」に携わる4名のパネ
リストを迎えてトーク&ディスカッ
ションを実施。参加者も増え、世代
を超えた交流を生み、この企画自体
が「掘場」とすることができました。

3rd action:「建築と共有」(2016年)
これからの社会を担う世代と共に未
来の「共」の在り方を考えるため、
学生アイデアコンペ+講評会を開催。
全国から多数の応募と講評会への参
加があり、所属や世代を超えた知の
交流をつくることができました。

4th action「Architecture & Society/
Architect in Society」(2017年)
視点を世界に広げ、海外で活躍する
同世代の設計者4名を招いて、建築
と社会、設計者の関わりを語り合う
パネルディスカッションを実施。事
前に海外への視察も行い、幅と深み
のある成果を発信できました。



4th action パネルディスカッション風景



建築と社会

Architecture and Society

Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2018 04

Vol.99 No.1153

■特集予告

● 5月号／スポーツイベントを支える設備技術(仮)

● 6月号／「片岡安賞」

今月の表紙

「建築と社会」は、大正14年からB5版サイズになり、誌面が大きくなったためか、全体的に写真が増えた印象を受けます。

大正15年の表紙は、この号以外、誌名を大きく表示した2色刷りのシンプルなもの、1月号のみ、大阪市内の16のビルの写真がコラージュされた『オフィス・ビルディング』の特集号らしい、それまでとは異なった特徴的な表紙となっています。内容も片岡安会頭の『近代都市の発展と事務所建築の勃興』に始まり、経済面、プランニング、構造、設備、アメリカの事例紹介と多彩な内容になっています。

また、前年の大正14年から「主要建築材料値段」と題し、木材をはじめ様々な建材、塗料、水道、衛生器具などの値段が掲載され、会員への情報発信を行っていたようです。

特集 働き方と価値： 社会に繋がる多様なワークスタイル

【座談会】

新しい価値は社会の仕組みを変える—総論にかえて—

●加嶋章博/桑原悠樹/伊藤栄治/東 琢/河野 学/勝山太郎/戸川勝之

<コメント>渡部 剛 8

【各論】

- 1 リノベーションの仕事—そしてこれから—
[団地を整え直す立場から] ●土井睦浩 14
- 2 つながりの中で—行政で働く魅力—
[行政の立場から] ●吉川玲子 16
- 3 働くこと 考えること 生きること
—建築設計の働き方の一つとして—
[建築設計者の立場から] ●三谷帯介 18
- 4 人/境界/社会—けっこうおもしろいやん…—
[構造設計を楽しんでいる立場から] ●村上陸太 20
- 5 仕事としての建設業—これからの働き方とは、
そして現場管理者として求められるものは—
[次世代の現場管理者を育てる立場から] ●七條 稔 22
- 6 ポリシーは「人の役に立つこと」—33年の営業経験を経て—
[塗料メーカーの営業マンの立場から] ●岡田全可 24
- 7 建築の歴史的価値を社会化する
[建築の保存再生の立場から] ●笠原一人 26
- 8 建築と不動産のあいだで働くこと—変化のマネジメント—
[建築と不動産のあいだの立場から] ●高橋寿太郎 28
- 9 家づくりを任せてもらえる設計士に
[ハウスメーカー設計士の立場から] ●古山太一 30
- 10 建築設計の領域拡張と仕事の価値
—これからの社会とエネルギー—
[地球と共生する生き方を模索する立場から] ●澤 秀俊 32
- 11 もしも建築学という分野がなかったら
—35年間の教員生活をふりかえる—
[大学教員の立場から] ●吉村英祐 34

会告	第64回工高生デザインコンクール作品募集 第1回建築セミナー「暮らし」から考える住まいの 寸法入門講座 奈良県農業研究開発センター及びなら食と農の魅力 創造国際大学校見学会 U-35委員会企画 5th action「建築と未来」第1回 フューチャーセッション 20年後、幸せに「すまう」 ご案内	1
作品作風	ケイ・オブティコムビル	4
gallery	よりしろ●田村慶子	6
法令コーナー	伝建条例を制定 ～神戸市北野町山本通伝統的建造物群保存地区～ ●鈴木瑤子	36
設備の頁	最新リモコン事情～温水洗浄便座●山中章己	37
information	「MOK2018」第23期生 募集要項／特別展「小磯良 平と吉原治良」／特別展「江戸の戯画—鳥羽絵から 北斎・国芳・暁斎まで」／ブーシキン美術館展— 旅するフランス風景画	38
月間の動き	平成30年2月	40



所在地 大阪府大阪市中央区城見
敷地面積 31,869.70㎡
建築面積 2,470.40㎡
延床面積 49,612.41㎡
構造規模 RC+S造 免震構造、地上22階、塔屋2階
工期 2015年4月～2017年9月
最寄駅 JR・京阪電鉄 京橋駅、地下鉄 大阪ビジネスパーク駅
撮影 古川泰造／竹中工務店

ケイ・オプティコムビル

建 築 主 関電不動産開発株式会社
 設計・監理 竹中工務店
 施 工 竹中工務店

大阪城北東の大阪ビジネスパーク（以下OBP）内に位置する、OBP開発黎明期の1974年に竣工した旧松下電工ビルの建替である。停滞するOBPエリアの魅力再生につなげる事を目指して、環境配慮型次世代オフィスビルを創造した。

外殻フレーム免震構造による、四面開放の整形無柱執務空間には、放射併用パーソナル空調、新たに開発したシステム照明器具、外周部窓際下部の定風量換気装置からの自動制御による外気導入等を、様々なセンサと連動させることで、機能性、快適性、省エネ性に最大限配慮した。共用部においても、オフィスワーカーの活動に合わせた多様な空間を用意し、屋上のテラスに至っては、屋外環境の快適具合を「ソトワーク指数[®]」によってワーカーに表示することで、その利用を促進し、知的生産性と省エネ性の向上に寄与した。

CASBEE大阪みらいでは最高ランクのSクラス（BEE値4.2）を獲得。エネルギー消費性能計算プログラムではBEI0.48となり、DBJ Green Building 認証 5 ☆も付与された。高水準のBCP性能と環境配慮・省エネルギー計画とする事で、ビル事業者とテナントにとっての、事業価値と収益力向上に寄与するオフィスビルを実現することができた。

（河合哲夫、合田 靖、阪本泰智、阪田 哲／竹中工務店）



南西側鳥瞰



屋上テラス



ピロティ



基準階EVホール



執務室



エントランスホール

よりしろ

陶芸家

田村 慶子

「よりしろ」というタイトルのもとに
四度の個展を開いてきました。

「よりしろ」とは、元来スピリチュアル
なものが依り憑く対象をさす言葉です。
10年前、亡骸と共に火葬され、焼け
残って遺族のもとに還り、その遺族の
葬送に、そのまた遺族の葬送にと、何度
も繰り返し使われるやきものを制作し
ていた時に、この言葉がうかびました。
この後、個展の回を重ねるにつれて、
亡骸と共に火葬されずとも、亡骸の胸に
抱かれる形状でなくとも、空洞をはら
む陶の立体は既にそれだけで想いや記
憶の器である得と考えるようになり、
形や大きさへの縛りがなくなりました。
また、昨年の個展のための制作過程では、
受容する器であることを思い描いて成形
した作品が、捧げものやお供えものを
載せる形となっていることに気づき、
今後の制作の手がかりを得たように感
じています。

焼き物制作に向き合い始めた若い頃、
ただ漠然と「器とは、物のみならず人の
想いも容れるもの」と考えてはしまし
たが、今あらためてそれを確かめてい
るように思います。

田村 慶子（たむら けいこ）

1970 大阪陶芸教室にて水野清亀
・ひさの両氏に師事
1975 早稲田大学文学部美術史学科
卒業
1977 女流陶芸展にて新人賞受賞
1990 大阪市福島区に築窯
とうたす陶房をひらく
1998 伊丹クラフト展にて優秀賞受賞
1996年より2017年までに個展8回
その他グループ展・公募展出品多数
とうたす陶芸教室主宰
[http://www.tortoise-tamura.jp/
index.html](http://www.tortoise-tamura.jp/index.html)

企画編集：倉渕奈千子（作品作風小委員会）



【特集】

働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル

建築にまつわる多くのステークホルダーの「働き方」（日常の仕事の進め方や時間の使い方等々）に焦点を当て、同時にその方々が大切にしている仕事の「価値」（目の前の目標や将来に向けての夢等々）やポリシー等を執筆していただくことで、建築（建築に限らず）の世界の多様性を浮き立たせ、社会との繋がり方の様々な可能性を見出すことを目指した。

今回の特集は、さまざまな職種を含めた「建築の各分野」に関わる内容になることから、「建築と社会」の編集委員会を構成する全ての小委員会・分科会が協力した企画となった。

執筆をお願いするにあたっては、できるだけ多様な立場からのご意見をいただきたいと考えた。また下記設問の中から自由選択とし、幅広い所見をいただけた。それぞれの立場から執筆いただいた、各論が示す建築の世界の広がりを感じ取っていただければ幸いである。

①仕事をする上で「これだけは譲れない考え」や「ポリシー」 ②仕事の価値と人生の価値について、その共通点と相違点 ③いまの仕事を選んだ理由、仕事の魅力 ④仕事をしていて、社会との繋がりや世間に理解されていないと感じること ⑤日々の仕事の中で、大変印象に残っていること ⑥「働き方改革」について ⑦分野・職能によって残業時間に反映される忙しさの割合、仕事の平準化の取り組みや提案 ⑧他分野・他業種の働き方への興味。興味がある分野・業種 ⑨人生をやり直せるとしたら、同じ仕事を選択するか ⑩仕事上影響を受けた人物や作品 ⑪自由記述

【座談会】

新しい価値は社会の仕組みを変えるー総論にかえてー

加嶋章博/桑原悠樹/伊藤栄治/東 琢/河野 学/勝山太郎/戸川勝之
＜コメント＞渡部 剛

【各論】

- | | |
|--|-------|
| 1 リノベーションの仕事ーそしてこれからー[団地を整え直す立場から] | 土井睦浩 |
| 2 つながりの中でー行政で働く魅力ー[行政の立場から] | 吉川玲子 |
| 3 働くこと 考えること 生きることー建築設計の働き方の一つとしてー[建築設計者の立場から] | 三谷帯介 |
| 4 人/境界/社会ーけっこうおもしろいやん……[構造設計を楽しんでいる立場から] | 村上陸太 |
| 5 仕事としての建設業ーこれからの働き方とは、そして現場管理者として求められるものはー[次世代の現場管理者を育てる立場から] | 七條 稔 |
| 6 ポリシーは「人の役に立つこと」ー33年の営業経験を経てー[塗料メーカーの営業マンの立場から] | 岡田全可 |
| 7 建築の歴史的価値を社会化する[建築の保存再生の立場から] | 笠原一人 |
| 8 建築と不動産のあいだで働くことー変化のマネジメントー[建築と不動産のあいだの立場から] | 高橋寿太郎 |
| 9 家づくりを任せてもらえる設計士に[ハウスメーカー設計士の立場から] | 古山太一 |
| 10 建築設計の領域拡張と仕事の価値ーこれからの社会とエネルギーー[地球と共生する生き方を模索する立場から] | 澤 秀俊 |
| 11 もしも建築学という分野がなかったらー35年間の教員生活をふりかえるー[大学教員の立場から] | 吉村英祐 |

企画：特別編集委員会

勝山太郎/戸川勝之/加嶋章博/田中直人/渡部 剛/桑原悠樹/赤川貴世友/黒柳 亮/伊藤栄治/
橋本直樹/東 琢/高橋秀一/河野 学/前田 衛

新しい価値は社会の 仕組みを変える

—総論にかえて—

実施年月日：平成30年2月28日(水)

場 所：日本建築協会会議室

加嶋章博（特別編集委員）

摂南大学

桑原悠樹（特別編集委員）

竹中工務店

伊藤栄治（特別編集委員）

安井建築設計事務所

東 琢（特別編集委員）

鴻池組

河野 学（特別編集委員）

京都市住宅供給公社

勝山太郎（編集委員長）

日建設計

戸川勝之（副編集委員長）

安井建築設計事務所

〔コメント〕

渡部 剛（特別編集委員）

安井建築設計事務所

■はじめに

勝山：内容はすべて面白かった。皆さんばらばらでそれはそれでよかった。自分の知らない世界があった。

戸川：読んでいたらやはり皆さんやりたいことに向かって没頭してやっている感がある。

伊藤：写真が少なく文章が多かった。皆さん書きたいことが結構あったかもしれない。

河野：総論を考えるにあたって、全て読んでみて共通の考えとか話題とかが何点かあった。それが総論に通じるところがある。共通の考えで、仕事と社会の関連性で貢献しなければならない意識、心構えとして自分自身が縮こまらず領域を広げること、総合力をもつことが必要であること、仕事の向き合い方について、楽しむこと、仕事＝人生であること、などそのあたりを（総論に）まとめていけばよいのでは。

勝山：建設という仕事の関係上、人との係わり方が圧倒的に多い。人との係わりで教えられたり、教えたりそういうのが多かった。

河野：人とかかわりが強いために相手のことを思って働き方改革は難しい業界だと感じた。

加嶋：皆さんポジティブだからこそ求められてやっているのではなく、自ら進んで深めておられるところがあり、その部分は自分自身のスタンスとしてやっておられる感じがした。

河野：働き方を変えていくにはご自身を変え

ていく。そして上司や施主に理解していただく。それを解決していく方法が求められる。

■分業化を考える

勝山：古山さんの原稿では分業化と言うことで企画・実施・申請等々でチームを分けて進めていることが書かれている。海外の事務所でも広く分業化が進んでいる。

河野：行政関係は分業化が進んでいる。記事にもあるように比較的休暇がとりやすい。

東：今回執筆頂いた方々の中では、設計者・施工者の立場としての3名（各者ゼネコン所属）の思いが共通しているように感じた。自分の仕事に面白さと生きがいを感じて積極的に業務をしている結果、「休み」という概念が薄れていくような。かけた時間の分だけ良い仕事ができるが、休みの確保との兼ね合いでのジレンマもあると思う。先ほどの分業についての話だが、設計業務を細分化してしまうと設計者としての「思い」というものが反映されづらくなるのではないかと。

勝山：世界を見ると日本が特殊な環境のように思う。世界は色々な面で分業化が進んでいる。防災計画とか法的なものはそれをするコンサルがいる。いろんなスペシャリストが寄ってきてチームをつくっている。日本ではお互いの領域をクロスオーバーしながら、一緒に創り上げるという意識を共有することを大事にしていって、そこにやりがいを感じているのも事実。



写真1 左手前から河野特別編集委員、東特別編集委員、勝山編集委員長
右手前から加嶋特別編集委員、伊藤特別編集委員、戸川副編集委員長、桑原特別編集委員

加嶋：人が交代しやすい環境がある。アメリカでは同じ業種であっても、例えば100%雇用に対して、30%の時間短縮による正規雇用契約といったものがある。それは数時間のアルバイトというわけではない。常勤としての70%契約という。仕事を引き継ぎやすい環境でないと実施は難しいと思う。

河野：日本の場合、教育も総合力が求められている。合わせて、海外進出等グローバル化も求められている中、海外の働き方を考えると総合力よりも、より専門的な分野に力を入れる必要があるように感じる。

勝山：どちらが幸せなのかわからないが、読んでいて日本の独自性が感じられる。

河野：働き方改革で良くないことが起きるのではないかの記事があった。ゆとり教育は成功か失敗か言えないが、目に見えて成功していると感じられず曖昧であると思われる。同じく働き方改革も曖昧のままだが終わってしまうのではないか。ゆとりをもたらずと言うことで技術研鑽がうまくいかない。仕事で時間をかけて技術を学んでいく分野もある。

東：個人の意見になるが、向上心のある人は業務での拘束時間の長短によって自己研鑽の度合いが変わる事はないと思う。働き方改革によって自由な時間が増える事になれば、自分のやりたい勉強をする時間に充てる事ができる。余暇の使い方を強制はできないが、そういう人にとっては自分にも会社にもプラスになるのではないか。

■仕事への新たな価値付け

勝山：いただいた原稿を見ていきたいのですが。最初URの土井さんの原稿からいきましょう。



写真2 右 勝山編集委員長
左 東特別編集委員

伊藤：リノベーションという言葉を生み出したことによって、新しい価値を生み出したことが書いてあった。言葉は大事ですね。新しい言葉を生み出したら価値が変わる。

勝山：時代の変化に合わせ、新たな価値創造にシフトチェンジされる様子が書かれていて、とても興味深かった。

加嶋：他の執筆者も、時代とともに変えていこうと言う意識が共通して感じられる。時代時代にどんな価値を持ち得るのか、新たな価値付けを行っていくこと自体が自分たちの使命ではないか。そんなメッセージがあって、自身の専門分野のいく末を開拓していこうとする姿勢が感じられる。新たな価値付けというキーワードがよく出ている。

河野：建築の分野で一から建物を建てることから、既存の建物を活用するためのアイデアを提供するほうに、仕事のやり方がシフトチェンジしている。

勝山：吉川さんの場合、仕事をしながら子育てを両立されている。本テーマにおいて、欠かせない視点を提供していただいている。

河野：女性の働き方について、この記事のように同じようなことを抱えていると思うが、皆さんの職場では、特に設計とか施工とかで女性の働き方はどのような感じか。

勝山：設計では女性の比率は年々高くなっていて皆活躍している。出産という節目の転換点がある中で、自身のスキルアップ・キャリアアップをどう図っていくかについて、個人的印象だが、男性よりも人生計画をちゃんと立てている感じがする。スケジュールも戦略的に考えている。それをどうサポートできるかが大事。

東：ゼネコンも含めて「けんせつ小町」という、建設業で働く女性の愛称ができています。公共工事の入札でも女性の活用が進んでいる企業を優遇する制度がある。会社によって温度差はあると思うが、国として女性の社会進出を後押しするようになってから特に取り組みが盛んになったと感じる。

■他分野の働き方を知る・経験する

勝山：行政の場合、様々な部署を何年か単位で異動するが、本人からするとどうなのか。興味がある。人が変わってもちゃんとできて



写真3 左から河野特別編集委員、
東特別編集委員、勝山編集委員長

いく仕組みができていることも興味深い。

戸川：その反面、行政の方々はプロジェクトの途中で変わることに對し、いろいろな思いがあり悔しさもあるのでは。

勝山：若い人は強制的でも違う部署に行くのはいろんな経験ができていいと思う。ひとつの世界にいつまでも居るのはよくないのでは。少々強引でも変えるのがよいのでは。そこでいろいろな働き方を経験する。竹中さんはどうなのか。

桑原：設計採用の場合、最初の1年は研修で設計4カ月、作業所4カ月、見積もり4カ月を経験する。いい経験になる。

勝山：建築は特に繋がりが多いからどっかで見えたと皆に影響が出る。みんなでやらないと難しい。時短とか適正な時間でやるには適正な工期を組むことも必要。その工期を決めるのはクライアントであったり、そのクライアントにアドバイスするのがコンサルとか設計事務所であったりするので、元の議論・スタートが大切。

東：新聞などを見えていても、発注者への働きかけは業界として行われていると感じる。具体的にはこれからだと思うが、施主へ「工期を下さい」「お金も下さい」では納得されないので、生産者側としても作業性を向上してバランスをとっていくような取り組みが模索されていると感じる。そういう意味でも「AIやロボットの活用」を見出し始めている。

勝山：行政とのかかわりでも、ここ数年許認可の書類が非常に増えている感がある。手続きに大変なパワーを使っている。

戸川：ここ20年で凄く増えましたね。かたや求められるスピードも早くなっている。

勝山：人間の能力はそんなに変わらない。その部分でもITとかAIの活用に活路を見出して

いくことになるかと。

戸川：施工の部分では、AIやロボットの開発記事を見るが、設計の部門でAIの活用は具体的にどうなるのだろう。

東：竹中工務店さんでは、HEROZ（株）さんのKishin（棋神）というAIを構造設計に導入している。凄いと思う。

勝山：時短とかめとりについては、世の中全体で、お互いがお互いの仕組みをフォローし合わないといけない。全部からんでくる。企画から造り上げていくグランドデザイン。簡単に言うとスケジュール設定になるが、無理のないスケジュールが組めるかということころに、かなり大きなウエイトがあると思う。

戸川：そのような無理のないスケジュールを組めるかが課題ですね。

河野：なかなかシステムを変えるのは難しい。自分の日ごろの生活でも基本はルーチンで動いている。それを全然違うことに変えることは困難。労力を必要とする。今やっている仕事の上にその労力をかけるかとなるとそれは難しい。

勝山：行政のかたは3年ごとに異動しても組織として回っていく仕組みを民間も学ぶところがある。替りがある。1人に集中しない。

加嶋：行政の仕事はある意味スケールが大きい。吉川さんは行政の立場をきちんと仰っている。様々な主体が連携する機会や場を提供するのが行政の立場でもあり、そうした役割を持つ一つの主体でもある。行政の役割は建物を作るだけと言うのではなく、もっとスケールの大きい立場で、まちづくりにダイレクトに関わるという仕事の魅力がきちんと書かれている。行政はどんな仕事をしているところか想像しづらい部分があるが、吉川さんのスタンスは明快で魅力的だと思う。



写真4 右 戸川副編集委員長
左 桑原特別編集委員

東：行政も含めて建設業の全業種間ローテーションがあれば、他社や他職種のこともわかるので面白いですね。

勝山：民間同士ではたまにあるが、公共へ民間の人が行く仕組みはない。

河野：3セクみたいところへ出向するのはある。

勝山：建築業界がハッピーになるには、そういった他の世界を知ると言うのは大事。民間同士、行政と民間の交流があっていいという気がする。逆の立場になればお互いがよくわかる。

■働き方・自己実現・育成・AI

勝山：三谷さんの原稿をみると、人との出会いから色々な刺激を受けることで、設計の仕事の楽しさが増していくことが良くわかる。若い設計者にはエールになる内容。このように前向きな設計者は仕事に生きがいを感じている一方で、どこまでが仕事でプライベートかという時間の概念の区切りは難しいと思っている人も多いと思う。

河野：プライベートの中でも仕事を常に考えている方もいる。

東：竹中工務店の村上さんも同様に私生活に仕事が入り込んでいることを書かれていた。

AIの話に戻るが、今後小説やマンガなども機械が自動で作り出すと言われている中で、設計業務も人が介在せずにAIが全てを行う時代が来るのだろうか。

河野：単純な決まった形をつくるのはできる。AIが発達したらなくなる仕事のランク付けがあったが、その中に建築関係はなかったと思う。

東：人間と機械で業務を分けるという形態になり、「人の仕事」としての建築は無くならない可能性が高そうですね。

戸川：建築はそれぞれ違う。やはり一品生産なところも大きいのでは。

加嶋：ディテールまですべて決定するAIとしての機能を建築の現場に期待することは難しいと思う。でも、例えば、商業地域の容積率いっぱいものを建てる場合に、敷地規制、コスト、利用者層など、様々な条件下でどのようなボリュームや形状が最適なのか、そういった決定作業にAIを活用できる可能性はあ



写真5 加嶋特別編集委員

る。

勝山：クライアントがそういうツールを持ち出したら設計者の価値は何なのと思う。その中でどう付加価値を出すか。設計はそのうちAIにかなりの領域を侵されると思う。

東：それが働き方改革の中で設計者の負担を減らすいい方向に繋がればいい。他の業種も同じかもしれない。

河野：あくまでも補助する立場でないと設計者は要らなくなる。

勝山：七條さんの原稿からゼネコンの現場の実態がよくわかる。

伊藤：（現場では）泊って施工図を書くことは当たり前だったけど、それを乗り越えさせる大きな魅力があったとありましたが、それはどんな魅力なんでしょうか。

東：私の場合での話となるが、新入生～数年の間はわからない事だらけで色々やってみたかった。経験が浅いうちは出来る事が限られているが、先輩から施工図を描いてみると言われ、初めて描く図面が楽しかった記憶がある。当然作業効率が悪くてなかなか進まず、徹夜してでもやりたいと思った事があった。

そのように、面白いと思ったら夜も厭わずやる気になってくる雰囲気の仕事も言われていると思う。逆に、翌日の朝までに完成させないと職人さんに渡せない、という場合もあり不本意ながら時間に追われてやる事もあった。

河野：簡単にできる仕事は心に残らない。困難や失敗したことを糧にして解決したものは何年後でもそれは覚えている。

勝山：追い込まれて乗り越える事が一番記憶に残る。これやったから次できるだろうという自信になる。

東：作図は外注が当たり前にもなっている。徹夜しなければならないほど個人の負担が重



写真6 桑原特別編集委員

くならないようにする必要はあるが、「勉強のため」という意味もあるので、そのバランスが大事だと感じる。

戸川：かたや、AIや自動化など便利なものを駆使した時に建築の技術が自分の身についていくか。どうつけていくか。

東：将棋の棋士もAIが指した手の意味を理解できない事があるようで、コンピュータが出した結論も結局は人間が理解しないと自分の実力にならないとの見解だった。将棋だけに限らず他の分野でも同じだと思う。

河野：何でも自動化するのは良くないと思う。例えば、構造計算書偽造問題も、システムを理解していないと、間違っているにも気付かない。

■人の繋がり方をデザイン

勝山：現場は指示系統が重要なのでピラミッド組織だと思うが、所長の裁量が大きい？

東：ほぼそれが全てと言っても過言ではないと思う。所長の言う事を聞かないと現場は組織として成り立たない。どの業界でも同じかもしれないが、誰が頭（所長）になるかによってまわりの対応が変わるという話も聞く。

伊藤：楽しそうな雰囲気の現場とそうではない現場はある？

東：それはある。配属員個々の裁量や性格にもよるだろうが、当初からおかれた現場の状況も少なからず影響すると思う。「お金がない」「工期もない」となればモチベーションが下がるのも無理はないかと。また、ひとたび事故が起こってしまうと当然雰囲気は暗くなる。現場以外ではどうでしょうか。

勝山：設計は少し異なる。組織にもよるが、担当者が優秀で頑張る人であれば、走りながら、その人が実質的にプロジェクトをリード

することもある。構造・設備ともタッグを組んで一緒に進まないといけない。

東：タテよりもヨコのつながりが大きいという事ですね。

勝山：ヨコの繋がりです勝負みたいところがある。行政はどうか。組織の体系でいくと違うように思うが。

河野：個々の心構えの違いで上から仕事が行ってきたとき。単なる作業でぱっと片付けるか、自己の考えを盛り込んで昇華させていくか、別のやり方がいいか試行錯誤するか、1人ひとりの考え方にもよる。

勝山：大学は個人個人のあつまり。

加嶋：大学によると思うが個人個人の研究室を並べているようなところがある。

河野：研究の分野はそうかもしれないが、教育と言うことを考えると他の科目との連携は考えておられると思うが。先生同士で相談するとかありますか。

加嶋：もちろん、研究は個人でできたとしても、教育面では横のつながりがやはり欠かせない。教育改善は一人では難しく、連携してはじめて大きな成果が期待できる。自身の担当分野ではできても、総合的な改善に結びつけるには色んな分野の方と考えていかないと効果に繋がらない。

勝山：岡田さんの原稿は、開発営業の仕事を通して、ストレートかつ具体的に現実の課題などを述べてもらいながら、とても前向きな内容になっている。

東：「仕事のできる人に仕事集中して超多忙になるのは当たり前」という現実を書かれていたが、それは働き方改革の課題でもあると思った。

河野：そうなりがち。当たり前は別として。

■領域を拓く取組

加嶋：高橋さんはかつてはなかったフィールドの開拓者。

勝山：変化のマネジメントとして、あらゆるメンバーと明文化されたビジョン・働き方の共有化を定期的な読み合わせを通じて徹底して行われているのはすごい。新たな価値創造と働き方についての話に説得力と臨場感があつた。

加嶋：自身の分野が果たし得る役割を柔軟に

捉え、専門分野の領域を拓いていっておられる。また、それを会社自体や組織内の個々の働き方にもあてはめておられるように思える。

東：会社が変わっていくというスタンスはすごいと思った。

加嶋：近代建築史研究者の笠原さんがいう「建築の歴史的価値を社会化する」というメッセージにも、従来の建築史研究者の領域を拓いていこうとする姿勢が感じられる。建築史研究者が担うこうした役割は、これからの社会では本当に重要だと思う。建築史研究としての歴史的評価の発見と記録にとどまらず、地域社会で建物の価値を共有しながら地域資源として保存活用していくには、関連する様々な分野を横断できる知見がやはり必要になってくる。そうした専門性は、持続性のあるまちづくりという面から見てもとても重要だと思う。

勝山：澤さんの原稿は具体的な取り組みや海外での経験をベースに、働き方・生き方も含めてデザインの領域を拓ける活動を行われていることが良くわかる。

東：ベトナムでの朝夕1時間、計2時間の瞑想時間はいいなあと思った。これは就業時間に含まれるのか、給料がもらえるのかが気になった。心身ともにリフレッシュできて素晴らしいと思った。

河野：瞑想時間も給料もらえるのでしょうか。仕事の効率化を上げるためにやっている。日本の企業で最近仮眠をとりいれている企業がある。20分仮眠をとれば作業効率が上がる話もある。

加嶋：昼間の20分は効果があるみたい。



写真7 右 伊藤特別編集委員
左 戸川副編集委員長



写真8 東特別編集委員

■立場の違う人との「価値の共有」

勝山：ひととおりに見ていったが、こうやっていろいろな業種の人の原稿を横に並べてみると、伝統的なラインの中で模索している人と、新しい働き方の仕組みそのものにトライしている人がいたりの違いが明解になる。

桑原：行政の方たちは業種がどんどん変わるという話があった。組織の話で言うと、プロジェクトごとに組むパートナーや上司は、ひとつプロジェクトが終わるごとに変わっていく方がいいんじゃないかなあと思う。現場でも同じ所長の下についている人もいれば、所長がどんどん変わっていく人もいるだろう。いろんな視点で仕事を見るという意味でも、ひとつプロジェクトが終われば別の人と組むというのがこれからの時代にはいいのではないかな。

河野：それぞれに良さがあると思う。上司や尊敬する人に一生ついて行ってその人の技術を盗んで学んで一人前になる。

勝山：何年一緒にやったら技術を吸収できるのか。スパンの問題もある。分業化の話とも関係するが、限られたリソースの中で何かをやるとすれば、その中で人材を流動化させなければならない。多様な働き方をその中で覚える。そのうえでさらに他の世界を知ることができる。これだけかわりが多い仕事はひとり頑張っても厳しい。全部が連携する必要がある。そういう意味で今回はいい企画だと思う。それを受けて自分たちがやれることは何だろう。

河野：これらの原稿を読んで自分のいるところはどんなんだと考えた。自分自身の意識の改革に寄与したと思う。それがよかったところがある。

加嶋：自分がどれだけ違う分野の人と接して

きたのか考えさせられた。共有可能なプロジェクトを作る。それはいろんな立場の人と接する中で、立場の違う人との価値の共有が仕事を前へ進めていくうえで大事なことだと再認識させられた。「価値の共有」は共通するキーワードと思った。

伊藤：七條さんの「建築は人々にどんな建築ができるだろうと注目される仕事である」のくだりは、やはり建築は注目される仕事だと思う。しかし、例えばAIが自動的につくった建物だらけだったら誰も注目しなくなるわけで、やはり新しい価値がない。新しい価値がそこにないと。魅力があれば学生たちも建築分野に入ってくると思う。今の小学生のなりた職業はユーチューバーとのこと。新しいものをつくったから価値が生まれた。みんなが注目してみるからますますそっちの方面が広がっていく。建築も新しい言葉とか価値を見出していくことで働き方も変わっていくのかなあ。

河野：「働き方改革」という言葉自体に皆が意識するようになって、変えようという自分自身の心構えができてくる。

東：我々が働いている建設業界の魅力をアピールするスタイルを見つけていきたい。また、いくら魅力があっても給料が安かったり、労働時間が長いという実態があると若者に敬遠される事になってしまう。そういう意味でも今政府が進めている働き方改革は非常に重要だと思う。国土交通省の資料によると、4週4休以下で就業している人の割合が、土木も含む建設工事全体では64%（うち建築工事のみでは73.5%）との事。完全週休2日となる4週8休の割合は5.7%（2.8%）であり、この数字だけを見れば魅力ある業種とは言えない。今後のハードルは高いと思うが、国も含めた取り組みの状況を見ていると幸先はいいのかも知れないと思う。

勝山：建設業の労働時間はどうしたら改善できるのか。設計業界もそうだが。

東：いろいろな切り口があると思うが、家に帰ってからも実質仕事しているような状況の人は対策が難しいと感じる。会社にいる時だけ仕事をするという前提のもと、拘束時間を削っていく方法を考える形になるのでは。

勝山：労働単価を上げることと、ゆっくり創

ることを是とする価値転換。

東：職人さんの待遇についても、その仕組みから考え直していこうという取り組みが始まっている。賃金が日給で支払われている人が多い中、今の4週4休を4週8休に変えてしまうと単純に2割近く収入が下がる。その対策として仮に労働単価を上げて、その給料分は休めるかと言うとそうはならない。「職場」である現場が動いている以上、出勤せざるをえない事になる。最近はそうした状況の打開策として、全現場で「同一日の4週8閉所」を目指す取り組みも模索されている。全ての現場を閉所（全く作業をしない状態）にすれば、他の現場に応援に行くこともできないので。

伊藤：ゆっくりつくることに価値を見いだせれば、建築主さんもゆっくりつくればいいものができるとなる。

■「時間」についての意識改革

東：経験上、いろいろな意味で適正工期だとお客様にとって「いいもの」ができると思う。「早く・安く」が悪いとは言いたくないが、建設業界としての意識改革も必要かもしれない。

伊藤：何か月もかけてつくったビルなんですよ。例えば、これは品質がいいビルだということになったらいい。早いのがお客様に本当によかったのか。早いのがありがたいではないのかもしれない。

河野：もっと時間をかければ施主により良い提案を提供できたのではと、執筆者の中にも早く仕上げることとのジレンマを抱えている人がいる。

勝山：何でも早くて便利だとか。宅配の話もそうだが、われわれ消費者も加担しているが、



写真9 手前から加嶋特別編集委員、伊藤特別編集委員、戸川副編集委員長、桑原特別編集委員

そういうところを変えていかなければならない。海外で言うと、17時か18時に店が閉まってしまう、それが社会のルールになっている国もある。それで誰も文句を言わない。日本のように深夜まで開いているスーパーは見当たらない。

加嶋：会社の人と飲みに行くと言うのは日本的。欧米では仕事の人と飲みに行くことはむしろ少ない。

勝山：家族第一。家族を大事にする。それで回る仕組みになっている。

戸川：そういう風に回る社会のシステムに歴史・時間とともに変わってきたのだろうか。日本もこれからそのような時代になっていくならば、海外はどういう変わり方をしてきたのだろうか？

東：20世紀末頃は、日本はドイツと経済状況が似ていたと聞いたことがある。ドイツはそこから「時短」と「作業効率の向上」を成し遂げ、現在に至るとのこと。全く同じようにはいかないと思うが、見習うべきことは多いと思う。

勝山：仕事の仕組みを見直す・新しい価値を見つける・多くの人が価値を共有できるプロジェクトを創る・その中で人をもっと流動化する仕組みを創る・それがもっと広がって他業種も含めた横の強いつながりを創る・互いの立場を深く理解する関係を創る。といったことで社会のスピード感に対応しながら、もっとゆっくりつくるといった視点も持ち込みつつ、業態の垣根を超えた繋がりの中でみんなで働き方や時間をデザインすることができれば。

戸川：それぞれの目標や目的は違うところもあるのだろうけど、そこにできる建物は50年60年とずっと建ち続けるわけで、当然いい加

減なこととはできない。お互いを知りつつも厳しさと時間のバランスが難しいけど必要ですね。

■スーパーローテーションXコラボレーション

加嶋：先程、いつも同じ上司と組んでいる場合もあると仰っていたが、それは例えば、病院チームみたいな専門性があるって、そうなるってしまうのか。

勝山：専門性が高いところはどうしても人は動かない。それもよくないのではないかと。特に、若い時に専門性に特化し過ぎるのはいかなものか。多様性を知ることが大事だと思う。

加嶋：医学の分野ではいま、スーパーローテーションという、入局前に内科や救急など様々な分野で基本研修を行うようになっていく。この制度では、色々な現場を回ったうえで自身が進む分野を決める。つまり専門的な分野に進んだとしても、バランスのある診療能力が求められている。

勝山：ローテーションは働き方に繋がる。多様性をみるのは非常に大事。それによって相手のことを思いやる気持ちを育てる。自分ひとりだけで仕事は完結していない。

加嶋：大学だとローテートするというのは想像できないが、できたら面白い。例えば他の分野の教員を2カ月やるとか。できるかもしれない。

伊藤：何ヶ月か離れると今やっている専門分野から遅れてしまうという危機感を感じることはないだろうか。構造でもちょっと離れたら最新の法律やトレンドが分からなくなる。研究だとIPSとかは1日1日進化しているから、違うところにいったら戻ってこれない怖さもある。そんなことを考えたら変わってはいけない。

伊藤：何割対何割で両方行くとか。バランスを取りながらどっちかやるとか。全部離れるとかではなくて、そういうのがいいかもしれない。今の働き方改革でも会社に勤めながら、何かしてもいいよと言うような感じがいいように思う。

河野：先端を走っている研究分野や企業では難しいかもしれない。

加嶋：近年、分野横断型の研究が推奨されている。これまでのように固定的な分野の視点ではなく、複数の分野を統合させた新たな知見による学際的研究やイノベーションだ。最近、大学生に求められている能力にも、チームワーク力というものがある。それは建築学科であれば、学生が設計するのにチームワークを築いてやるという事とは少し違って、建築分野以外の人といかにコミュニケーションを図りながら提案を生み出していけるかというものだ。他分野の人とのコミュニケーション、意思疎通力の育成がいまの教育現場で問われている。

勝山：コラボレーション力の向上は避けて通れない。社会の要請として間違いなく。先陣を切っているのが高橋さんと澤さんのような方。そうやって新しい価値を見出していき、社会の仕組みは変わっていくのだと感じた。一方でやや受動的な設計や施工を生業としているところはどう変わっていくか課題。色々な立場・分野の人が、社会と働き方を変えていかなければという問題意識を強く持ち、具体的な取り組みを行っていることが今回の企画でわかった。いろいろキーワードはいただいた原稿の中やこの議論の中で出たと思うので、自らの取り組みに生かしつつ、引き続き、何が変わったかを定期的にウォッチすることも大切かと。こんな企画をまた立ち上げたいと思う。

【コメント】

渡部：今回執筆いただいた原稿からは、共通して建築に真正面から向き合おうとする、人間の姿が見出されるように思えた。自らの立場で、自らの役割を、責任をもって果たそうとすることが、どれほど尊いことか。こうしたひとつひとつの真摯な人間の営みが、人類の歴史をかたちづくってきた、とするのは言い過ぎだろうか。何が本当で、何が嘘なのか、まるで分らない時代に私たちはいる。しかし、ここに描き出されているのは、建築にたずさわる人たちの、本当の姿のように思えた。



写真10 河野特別編集委員

1 団地を整え直す 立場から

リノベーションの仕事

—そしてこれから—

土井睦浩

UR都市機構

土井睦浩

1969年滋賀県生まれ。

福井大学大学院工学研究科環境設計工学修了
住宅・都市整備公団（現：UR）入社以降、都
市再開発、団地建替等の業務を経て、団地ス
トックの活用にとどり着き現在に至る。

従事した代表的な住戸リノベーションは
「MUJI×UR」（2013 GOOD DESIGN賞）、
「暮粋」（2015 GOOD DESIGN賞）その他、
京女×UR、関西大学連携プロジェクトなど
にも携わる。

■リノベーション？

今、建築にまつわる仕事は様々。

ものを作らずとも空間を生かす、コミュニ
ティ再生を目指すなどのソフトな試みもりっ
ぱな領域になっている今日この頃、世間では
団地という言葉からどのような印象を受ける
のだろうか。やはり地味な印象なのか。しか
しながら最近はリノベーションという言葉で
彩られる場面も多くなっている。

リノベーションとリフォームとリニューアル、どの言葉を使う？どう違う？なんて言っ
ているうちにリノベーションという言葉が定
着。私はそのリノベーションというお仕事を右
往左往しながらはまり込んで8年目を迎えた。

■保全+リノベ

UR都市機構（以下「UR」という。）では、
日本住宅公団時代から引き継いできた団地を
技術的に維持する仕事については、保全という
言葉で表現してきた。そこには安全・安心は宿
るが、新たな価値を付与するイメージはない。

リノベーションという言葉には安全・安心
にデザインが加わることにより、現状を超え
てそこに新たな価値が付与されるという意味
あいを感じられるのではないだろうか。

しかし、価値観がますます多様化している
現在では、そのようなリノベを提供すると
いっても簡単ではない。それも1戸ではない
1棟でもない1団地を超えての量産だ。

バリエーションはどうする？

予算は？どのような設備改善が可能？

それぞれの団地の生まれた年は違う。だか
らスペックも同じではない。もちろん間取り
も様々。生まれた年が同じでも設計や構造が
違う。設計が同じでも個々の建設会社が受け
持った工区ごとで施工に特色がある。意外と難
しい。けっこう奥深い。やり始めると面白い。

■再びリノベーション

「今はリノベーションの仕事をしています」。

仕事内容の質問に対して最近ではこの言葉
でコミュニケーションがとれるようになってき
た。付け加えると、私の仕事は住戸リノベ
ーションを軸としながら住棟共用部や屋外空間も
含めてURの団地を整え直していくことである。

古臭いと思われがちな団地であるが、実際

にはとても豊かで安全な屋外空間があること、
住まうのにコンパクトで低コストであること、
そして簡素ながらも自ら整える暮らしが実現
できる場所と思っている。特に屋外の緑空間
は何十年という時間が作り上げたものだ。こ
の時間が作り出す奥行きへの深さは新築マン
ションでは到底実現できない。

そのことを伝えるためのツールとして、住
戸リノベーションブランド「暮粋（くら・
しゅく）」の創出や、無印とのコラボである
「MUJI×UR」の企画、その他、共用部・屋外
の整備などに従事してきた。

URが進めている「リノベーション住戸の
量産化」では日々様々な問題に直面するが、
最近ではメディア露出も増え、この分野に社
会の関心が集まりつつあること自体はうれし
く思っているし、時代の変化を感じる。

本稿では、まずUR自身、私自身、時代の変
化に対応しながら柔軟にその場ごとに仕事の
価値を見出す必要があったことを歴史を振り
返り再認識したい。そして、リノベーション
のベースとなる建物の維持・保全という業務
の重要性、そのうえでリノベーションのさらな
る可能性、そして、この仕事が発展していくた
めには、これらの仕事に取り組んでいるすべて
の人たちにこの仕事にやりがい・充実感を感じ
てもらいたいこと、そのためにはそれぞれの立
場でのためめぬ努力が必要なことを述べたい。

■公団からUR（仕事の変遷）

URは、昭和30年の設立以来、事業内容が
大きく変化しながら今日に至っている。設立
当初は住宅の大量供給を目的とした団地開
発からスタートし、それから市街地再開発、
ウォーターフロント開発などへ。設立当初に
建設した団地は早くも昭和60年代から団地再
生事業がスタートしている。

私自身、都市再開発部門を出発点として、
団地の建替、そして今、前述の通り、団地リノ
ベーションの仕事に従事している。社会人当初
は再開発の分野でプロとして生きていきたいと
思っていたのが懐かしい。事業構成も大きく変
わってきたが個別の事業内容も変化している。

団地再生についていえば、事業が始まった
初期は団地再生＝団地の建替であった。高度成
長期は過ぎ去っていたが、より新しく快適で広

い住宅へという社会の欲求に従うことに疑問の余地がなかった時代だ（団地再生フェーズ1）。

その後、バブルを経て、社会から資金的な活力が奪われ、世帯数減、人口減がより現実的な問題としてクローズアップされることにしたが、建替え後の戸数は必要最小限とし、余剰地は別用途への転換をはかるようになった。（団地再生フェーズ2）。

そして現在、再生の焦点は既存建物の活用、コミュニティの再生に移ってきている。既存ストックをいかにして延命させるかという保全技術を生み出し投入するにとどまらず、時間を経た建築物ならではのよさを見出し、デザインを施すことによって新たな価値を付与することに挑戦している（団地再生フェーズ3）。

私自身、以前はRCづくりでも50年経てば建替えなければならないものだと思信していた。しかし社会情勢の変化に加え改修技術の進歩により長期利用の前に立ちはだかった障害が減少すると、建物に対する見方に変化が生じた。そしていつの間にか今まで地味であったこのリノベーションフィールドがURでもフロントの一翼を担うようになってきている。

■時代への適応

このような仕事内容・意味づけ・働き方の変化はURだけの事象でなく、内容は異なるが建築界のみならず社会全般で起こってきたことではなかろうか。

事業史を紐解くと、わが社も高度成長期には次々と生まれる需要をとらえ、大胆かつ大規模・迅速に仕事を進めることが美德とされていた。昭和30年代の建設現場では土日もなくがむしゃらに仕事するさまが記録に残されている。

オイルショック以降になると成長スピードは落ち着くがまだまだ新たなものを追求める潮流に変化は見られない。一転して、バブル崩壊さらにリーマンショック以降、低成長期への移行が鮮明になりつつある現在は、事業を進めるにあたり利害関係者への説明責任を含めた社内外コンプライアンスの徹底、身の丈に合った事業形態への転換、働き方改革など、新たなキーワードに対する適応が強く求められている。

長く職業人として生きてこられた方ほど、仕事への向き合い方、周りのスタッフへの対応等、この変化にいかに適応するのか、自ら基軸にし

てきた仕事への価値観、ポリシーについても柔軟な変革が求められてきたのではないだろうか。

私自身、前述したように仕事に対する思い・考えは変遷してきた。考えが変わったのが先か、職務が変わったのが先か、間違いなく時代の変化で職務内容が変わり、考え方を変えていかなければならなかったはずだ。

■リノベの原点・その再評価

戦後以降、その事業ボリュームから建築業界では大規模開発・新築が主軸であることに疑問の余地はないであろう。リノベ領域は拡大傾向にあるといえども我が国ではようやく社会的認知が固まりつつある状況だ。このリノベーションという言葉自体、ほんの5年前ではメジャーではなかったことを肌身で感じている。

しかし広義においてリノベに対応する業態がなかったわけではない。戦後の集合住宅大量供給が始まってすぐに建物の修繕業務を実施するための業態が生まれている。これら業態は時代に応じた改修も行ってきたが、主には建物の安全・安心に対する貢献に限定されていた。実際、実社会への寄与は決して小さくなかったが、地味な扱いであったことは否めない。そしてこの保全業態が現在のリノベーションの重要な担い手となっている。

事実、この仕事に従事するようになって以来、安全・安心なリノベーションを提供し続けるには、経験的技術を中心とした幅広い知識が必要だと改めて気づかされている。建設年代ごとの使用資材を含む建物の特徴以外にも、そこに住まれた居住者の住まい方によって住戸の痛み方も違うし、以前の空き家修繕の時期によって修繕履歴・仕様も違っている。このような違いを把握し、使用可能なものは丁寧に補修・再利用し、工事騒音を抑制しながら、現在の生活に適応した設備更新を効率的な手順で実施する技術の獲得は簡単なものではない。

確かに社会の需要をマーケティング調査で緻密につかみ、市場が要請するデザインを取り込み商品を提供することも重要である。しかしリノベ技術の本質は愚直な技術の積み上げであり、その技術を保持していないチームでは安全・安心なリノベ商品の提供が困難であることは確かだ。

■リノベの仕事（これから）

リノベは新築マンションと違い、1戸単位で資材を動かす。手間はかかるが資材調達など商流はようやく整ってきた感はある。メーカーのリノベ対応商品のラインナップも増え、新たな資材の開発にも協力的になってきている。まだまだ足りないのはこの分野で働く人たちとこの仕事の社会的意義、プライドを共有し、高めていこうという姿勢である。

我々事業主としてもリノベを単に低成長期に限定した仕事と捉えてはいけない。大きな時代潮流の変化のなか拡大していく領域と明確に認識すべきである。また、業者側も地味で目立たないことに安住してはいけない。小規模な工事店も多く、人手の確保、育成など課題は多いが、課題解決を怠り安全性・品質の低下に陥れば、せっかくの飛躍の機会が損なわれると強く認識すべきである。

■おわりに

今、少しずつではあるが、WEB発信で工事店の担当者の仕事内容や思いを紹介する試みを続けている。リノベのPRということ以上に、ご家族・知人にこの仕事に従事していることの素晴らしさを知っていただきたいと思っている。他にもいろいろやれることもあるだろう。このようなことの積み重ねで、プライドを持ち将来的にも持続可能で大切な職域であると確信を持ってもらいたいものだ。

そのためには、団地リノベーションを建替までの延命との位置付けから、時を経た団地空間が価値ある貴重なものであるという位置へ一段と昇華させ、より野心的な長期利活用を目論みたいと考える。

その野心が私自身、この分野に残りの職業人としての時間をささげる原動力になるであろう。

（どい むつひろ）



写真 現場での打ち合わせ

つながりの中で

—行政で働く魅力—

吉川玲子

大阪府住宅まちづくり部都市居住課課長補佐

吉川玲子

昭和42年12月8日生まれ。

横浜国立大学を経て平成2年4月大阪府庁入庁。建築指導課、開発指導課、国際室、住宅建設課、総合計画課、都市整備推進センター、居住企画課、建築企画課、企画室、戦略事業室を経て、平成29年4月より現職

■将来を見据え市町村のサポート役

都道府県は、市民に直接関わる市町村や、国の方向性を決めていく国の中間にある組織であり、その役割は、地方分権の流れなどにより、私の働いていた間にも変わったが、大阪府の将来を見据えながら、市町村がまちづくりを進めていくために必要なサポートをしていく、ということだと考えている。

しかし、行政だけでできることは限られるので、公平性など難しい点も多くあるが、民間の皆様と連携しながら住みよいまちづくりを進めていきたいと考えている。

■仕事は人生の一部であり、なくてはならないもの

私にとっての仕事は、人生の一部であり、なくてはならないもの。人生の価値は、楽しい思い出を沢山作ることである。仕事の価値は、人生の価値でもあるので、楽しみは共通として考えるが、大きく違うのは、人生を楽しむために仕事があるのであり、仕事によって人生が苦しくなることは避けたい、ということ。どんな仕事でも、楽しみを見つけて、がんばってみる、ということが大事だと考えている。

大阪府では、3年程度で異動があり全く違う分野に携わる場合も少なくない。私自身、建築職として大阪府に採用されたが、建築指導行政、開発指導行政、国際交流分野、府営住宅の建替事業、都市計画、密集市街地対策、住宅政策、政策企画部局で最先端がん治療の実用化の促進など、職種にあまり関係ない業務にも携わってきた。全く違う分野に異動になっても、行政という職場を選んだからこそその貴重な経験であり、やりがいや楽しみを見出して取り組んできた。その経験があるからこそ、現在の業務をこなせていると考えている。

■仕事は一生続けるもの

子供のころから、仕事は一生続けるものだと考えていたので、まちづくりに関われる仕事で、ずっと続けていけるというのが選んだ理由である。

入庁当初、大阪府の仕事について、どのような役割があるのかなど、それほど理解をしているわけではなかったが、いろいろな業務に携わる経験を積む中で、様々な主体が連携

する機会、場の提供といった、行政だからこそできるまちづくりへの関わり方ができることが最大の魅力だと思っている。

■行政は常に社会とつながっている

行政の仕事は、常に社会とのつながりの中での業務である。社会的な課題が生じれば、その課題解決に向けた対策を考えていくのも行政の仕事になる。ただ、大阪府がどんな仕事をしているのかをわかっている人は一般的には多くないと思うし、公務員という仕事の一般的イメージは実際とは違うところもあるかな？と思ったりするときはある。

■組織の枠をこえた出会いが宝物

これまで様々な業務に携わる中で、組織の枠をこえた出会いが私の宝物だと感じている。最初に担当した業務の一つに、大阪まちなみ賞があり、大阪府、大阪市と大阪府建築士会で事務局をしていた。当時の担当者は今でも大変仲良く、時々集まっている。

都市整備推進センターに出向していた時には、市やUR、大阪府住宅供給公社からの出向者ととともに業務に取り組んでいた。国際室にいたころには、JET（Japan Exchange and Teaching）プログラムを担当しており、毎年100名以上の語学指導助手（ALT）や国際交流員（CIR）の研修などを担当、大阪府にも一人アメリカからの国際交流員がおり、そのスーパーバイザーをしていた。20年ほど経つが、いまだに姉妹のように仲良くしている。

また、本誌の法令分科会にも1年間参加、近畿圏の建築指導行政の担当者と毎月会合を持てたことは、通常の業務のつながりとは違う関係を築くことができ貴重な経験だった。

現在は、行政と民間が連携して中古住宅流通の活性化などに取り組む「大阪の住まい活性化フォーラム」の事務局も業務のひとつであり、民間の皆様と事業を進めている。1人でできる仕事は1人分だが、ネットワークにより、より幅広い業務ができると感じている。

フォーラムでの取り組みの一つとして、リノベーションまちづくりの普及促進を行っている。平成29年度には、大阪市東成区でセミナーを行った（図1）。セミナーの内容を練り、いかに空家活用将来つなげていくか

を視点に、講演者と議論しながら、企画をまとめ、丁寧な周知も行った。このセミナーをきっかけにいくつかの空き家利活用の話が始まっている。



図1 東成区リノベーションまちづくりセミナーちらし

また、フォーラムでは、平成29年度は建築物のリノベーションの優秀な取り組みを募り、今後の空家等対策のモデルとなるような、まちの活力や魅力アップに貢献している取り組み等について表彰を行い、府民へ情報発信することを目的として、リノベーションコンクールを実施した（図2）。外部有識者による審査委員会で審査を行ったが、新築物件の審査とは違う難しさがあった。

他にも、10年ほど前に、子供たちに自分の住まいや まちに対する関心と理解を深めてもらえるよう、小中学校への出前講座の体制の立ち上げ時に担当していた大阪府住まい・まちづくり教育普及協議会も担当している。立ち上げ時には小中学校の家庭科の先生の研究会などでPR活動をし、関心を持ってもらうことが一番の課題だったが、現在は、出前講座の依頼がどんどん入ってくるという発展ぶりに驚いた。大阪府、（一財）大阪建築防災センター、（一財）大阪住宅センター、（公社）大阪府建築士会、（一社）大阪府建築士事務所協会、（公社）日本建築家協会近畿支部、（一社）日本建築協会で組織される協議会での取り組みは、先進的なものだと思う。

それから、なかなか経験ができないものと



図2 リノベーションコンクールちらし

して、前職場では、大阪府熊取町にある京都大学原子炉実験所で研究が進められてきた最先端がん治療法であるホウ素中性子捕捉療法（BNCT）の世界初の医療化の促進、大阪に医療拠点を実現させるためのお手伝いをしてきた。担当になった当初は、お手伝いというより、足手まといだったかもしれないが、全国の研究者の先生方とお会いし、勉強させていただきながら頑張っているうちに、大阪府だからできること、大阪府でないとできないことがある、と先生方からおっしゃっていただき、信頼されるようになり、とてもやりがいを感じた。

現在、大阪医科大学に関西BNCT共同医療

センター（図3）の平成30年6月の開院に向けた準備が進んでいるところであり、本当に楽しみである。

■ある程度働き方改革は実現

私の職場では、残業が必要な時もあるが、取れるときには有給休暇を積極的に取るなど、仕事とプライベート、両方充実できるように仕事を進めたいと思っており、ある程度働き方改革は実現している。ただ、もっとと長期休暇を取る文化が日本にも浸透すれば、メリハリのある休暇の取り方ができるのと思う。

■幅広い知識を身につけ同じ仕事に就きたい

縁あって大阪府庁で働き始め、結婚、出産を経て、子育てしながら仕事を続けている。

私が入庁した年に、女性の建築職が10名を超え、現在は50名ほどになっている。市町村の建築職も女性が増えてきており、行政は女性が働きやすい職場なのだと思う。しかし、働きやすさ以上の魅力が行政にはある。前職場で多くの第一線で活躍されている研究者や医師とお仕事をさせていただき、人の生命にかかわる研究など、他分野、他業種にも興味はあるが、人生をやり直せるとしたら、もう少しいろいろな勉強をして、幅広い知識を身につけながら、やはり同じ仕事に就きたいと思う。

（よしかわ りょうこ）



図3 大阪医科大学関西BNCT共同医療センター完成イメージパース（平成30年6月開院予定）

3 建築設計者の立場から

働くこと 考えること 生きること

一建築設計の働き方の 一つとして一

三谷帯介

鹿島建設株式会社
関西支店建築設計部 設計主査

三谷帯介

昭和55年9月2日生まれ。

神戸大学工学部・同大学院自然科学研究科を経て、平成17年4月 鹿島建設(株)建築設計本部入社。

平成23年4月より、同関西支店建築設計部。

有難いことにこの執筆の機会を頂いたが、私が幅広い建築設計の働き方を包括的に書くのはあまりに恐れ多く難しい。考えた末、「自分にできるのは、頂いた設問の幾つかに、率直に生身で考えていることを書くことだ」と思い至った。ここに書くのは個人的な考えで偏りも甘さも多いのだが、経験と思考の至らなさ故と何卒お許しただけたらと思う。

問：なぜこの仕事を選んだか？

実は幼稚園の頃まで、「人の命はいつか尽きる」ということを知らなかった。ある時、親から「人は皆、いつかは死ぬのよ」と聞かされた。その衝撃は大きく、親との別れなど認めたくなくて毎晩泣いた。親戚にも聞いて回るが、皆「そうだよ」と言う。暫くして、幼いながらも「ああ、これは本当なんだ」と受け入れた。そこから、「だったら1回きりの人生をどう生きよう」と考え始めた。

■「一度きりの人生、好きなことをして幸せに生きたい」

これが直感的に思ったことであり、結論的には答えになった。そしてどうやら、父を見ても仕事は人生で相当な時間を充てるらしい。ならば仕事が好きなことだったらいい！子供の単純な思考回路でそんな考えに辿り着いた。

■ジャーナリストになりたかった

問題はそこからで、どんな仕事ならそうになれるかが分からない。「天文学者」「サッカー日本代表でW杯に出る」などと壮大な夢も見てみるものの、初めて「これ！」と思った仕事は「ジャーナリスト」だった。当時はよく不安定な中東状況が報道されていた。世界は日々動いていて、知らないことがたくさんある。それを自分が伝えられたらと思った。

その頃には「幸せに生きた方が良いのは他の人も同じ」と拡張して考えられるようになっていた。ということは、自分が楽しいと同時に他の人も幸せにできる仕事とは…？それでジャーナリストに行き着いたのだが、まだ何となくモヤモヤが残っていた。

ある日、高校卒業まで通ることになる通学路に図書館ができた。オープンスペースと4層吹抜のガラスカーテンウォールを持ったシ

ンプルな建物だが、毎日前を通っていると何か清々しい気持ちが出て、ふと「建築には人の気持ちを変える力があるのかも知れない」と思った。人は人生の大半を建築に囲まれている。ということは、建築が良いとその人の時間を幸せにできる。一度きりの人生なら良い空間で気持ちよく過ごすほうが良いはずだ。

そう思い至って小学校の卒業文集に「建築デザイナーになりたい」と記し（建築家や設計者という言葉はまだ知らなかった）、私の仕事探しは結論を見たのだった。

問：仕事の上で考えていること

■「生きられる舞台としての建築」

先述の出発点の延長で、設計ではいつもそんなことを考えている。舞台がなくても演劇はできるし演劇がなくても舞台は存在できるが、良い舞台があることで初めて気づける演劇の感動がある。建築も、人に生きられることで存在し、それがあって普段気付かない人や世界とのつながり、生きる幸せを感じられる舞台のようなものであれば良いと思う。その時、自分が考える舞台が人にいかに共有してもらえるかが大事になる。

■「建築」というプロジェクト

建築は膨大な数の関係者が参画する仕事で、かつアウトプットを通じて長く社会と多くの人に影響を与えることになる。そこで大切かなと思うのが、モノだけでなく「共有可能なプロジェクトをつくる」ということだ。

建築設計は、毎回異なる条件や状況に対し自分なりの思考で、無数の可能性の中からたった1つの「まだ世にないもの」を生み出す仕事だ。それを多くの人と共有することが必要で、仕事をしているとそういう職能の大切さを強く感じる。デザインは自分で様々なスタディを行い磨いていくが、それが人や社会にとってどういうことで、極端に言えば「何十年そこに建ち何万人に見られることに堪え得るか？」という射程距離がないと、なかなか人との共有は難しい気がする。反対に、最終的に建物が実現した時に参画者が「いいね」と思えるようリードするのも仕事で、「どうすれば大局を議論でき、共有が可能になるか」を考えていることが私は多い。

建物が竣工すると、身体で感じられるほど「良くできた」「良くない」という答えが現れることを経験する。この「良くない」という感覚は怖い。それは見た目の良し悪しだけでなく、むしろ「真摯に考え、スタディや技術を重ねてチャレンジできた」「独りよがりではなく、多くの人と力を合わせて作れた」「まだ見ぬ未来の使い手の心まで考えられた」など、背後にある「建築というプロジェクト」そのものについて「良かった」「良くなかった」という感覚が残り、それは何も知らずに建物を体験する人にも伝わる気がする。

そういうことを考えると大体思考はエンドレスになり、帰宅中も頭の中が回転していたり、「明日朝イチでやり直そう」と深夜に思うことも度々だが、少なくとも考えることはいつでもどこでもでき、そして自由だ。

問：働き方について

■デュアルに働く

建築設計の仕事に加えて、いくつかの活動に携わっている。部で発行する社内誌や「建築と社会」誌の編集、建築の領域を拡張して多様な価値を探る当協会「U-35委員会」の活動などで、社内誌とU-35では恐縮ながらリーダーを経験させていただいている。いずれも業務外時間を使った自主活動なので「仕事」ではないが、建築設計が「実践」だとしたら、これらはより広い視野で「思考」を磨く場だ。こうした活動に参画する背景には、「建築の持つ理論と実践の両面を往復しなさい」という恩師の教えと、ジャーナリストになりたかった思いの延長もあるかも知れない。

そこでは尊敬できる仲間と出会い、様々な方から教える機会を与えてくれる。その結果、自分が至っていないことや多様な価値観に客観的に気づき、集合知をつくり、1人では到達できないようなことも実現できる。また、社内誌では幅広い部門の若手に参加を促し、他部署とのコラボレーションを取り入れてコミュニケーションと刺激を生み出すなど、個とチームの力を高める一つのツールとしても毎号試行錯誤している。

ただ、それらを仕事に加えて行うので当然色々大変さも伴い工夫を要するし、雑誌を作る時もU-35で活動し世に問う時も議論を

繰り返すが、毎回最後まで「これで正しいのか？」という思いと背中合わせになる。しかし「やりたいことがある」というのはそういうものだし、それを経て得られる財産が多く、「狭めることはいつでもできる。今はできるところまで開こう」と決めている。

得られたことはすぐには仕事に繋がらないかも知れないが、これから一層大きな変化を余儀なくされる社会において、設計者に必要な職能や建築の世界も広がっていくだろう。経験、人との繋がり、思考の枠組はいつかそこに活きるような気がしている。



毎回白熱した議論を積み重ねる「U-35委員会」

問：仕事と人生の価値について

■「野原を走る列車」

人生に対してそんなイメージを持っている。決まった線路はなくて、常に「どちらに進めばより良い景色に出会えるだろう」と考えてハンドルを切っていき、ただ自分の走った後には轍のように線路ができていく。ハンドルの判断には直感も大事だし、経験も役立つし、そういう場面や人に会おう運も必要だろう。それは仕事にも相關している気がする。

建築設計の仕事の過程は、前述のように「野原を走る列車」に似ている。この仕事が無ければ、ジリジリと悩むことも、社会や人間の生を具体的に考えることももう少し少なかっただろう。仕事での経験は、否応なく人生を複雑で実りあるものにしている。

■世代をつなぐということ

仕事を通じて上司・先輩や仲間、施工者や社内外の技術者など多くの人に出会う。特に記憶に残るのはそうした方々から学んだことが多い。業界の先達からは勿論のこと、普段なら出会わない立場の施主から教えられることも多い。ある時は施主の担当者から物事を進める覚悟と決断力を学んだ。初めて全段階

に関わったプロジェクトでは、建物を引き渡した時、厳しかった役員から「時々遊びに来なさい。待ってるよ。」と言われた。提案を見るなり「君がやりたいと言うなら、文句ない。」と即答される役員もいた。そんな目上の施主達の広い度量にも育てられた。

学校のプロジェクトでは、竣工数年後に生徒達と話す機会を得た。建設時は幾つかのワークショップで設計意図を話す機会もあったが、世代が違う彼らには伝わっていない。そこで改めて話すと、「自分の学校にそんなことが隠されていたなんて」と喜ばれた。

帰る際、正門に一人の生徒が待っていた。生徒会として文化祭の企画に取り組んでいて、やりたいことはあるのだがどうやって形にしたら良いか悩んでいるらしく、「さっきの話を聞いて、コンセプトを考えて実現するコツを質問したい」と言う。駅まで歩きながら思いを聞き出し、即席のヒントを幾つか伝えた。彼女は別れ際に礼を言い、「文化祭、絶対見に来て下さいね！」と残して笑顔で向かいのホームへの階段を上がっていった。

その秋、約束通りこっそり文化祭を訪れた。会場には、確かにあの時伝えたヒントが高校生らしい手作り感満載の手法で、想像を超えた空間の使い方と温かみを持って実現していた。ささやかなことではあるが、「自分の仕事」が、次の世代にも何かを伝えられたのかも知れない」と思った。

考えてみれば、建築は人類がそれを作り始めた頃から、世代をつないでいくものだ。前の世代が考え作ったものを次の世代が引き継ぐ。建築に限らずとも、文化や知恵、学びといったものも同じで、私も恩師から教えるを受け、先達方や仲間へ学び、目上の施主に育てられた。そして現在、年々自分の立場が変化していることを感じる。気付けばプロジェクトや社内外の活動に多くの後輩ができ、活動を見に来る学生と話す機会も増え、もうすぐ親にもなろうとしている。設計者としての日々の格闘が建築という大きな流れの中に位置づけられ、微かでも人の人生や社会に貢献でき、世代をつないでいくサイクルのピースになるとしたら、それは仕事と人生を貫く根源的な価値なのかもしれない、と感じている。

(みたに だいすけ)

4 構造設計を 楽しんでいる立場から

人/境界/社会

ーけっこうおもしろいやん……ー

村上陸太

株式会社竹中工務店 技術本部長

村上陸太

昭和33年6月24日生まれ。

天王寺高校、京都大学・大学院修士課程を経て
昭和58年4月 ㈱竹中工務店入社。

昭和61年4月から大阪本店設計部構造部門。

平成28年3月より現職

■建築の魅力

私が感じている“建築”の魅力、1つは、建築は1人の力でできるものではなく、多くの人達との協業で作られる事。そのため、多彩な“人”と触れ合い、1つの目標に向かって力を合わせることができる。

もう一つの魅力、それは、協業によって送り出された建築作品により、社会の夢をかなえることができる事。自分たちの作品が社会に貢献できていると感じられる時、感動と達成感を感じることができる。



写真1 作業所見学会での得意ポーズ

写真1は、ある物件の躯体がほぼ完了した時に自分で主催した作業所見学会での写真であるが（日付を見ると1992年…26年前）、自信満々の気取った格好でピースサインをする姿、今見ると恥ずかしいポーズだが、それだけ誇らしさと達成感を感じていたのだと思う。

構造設計者としての私が、この魅力ある“建築”という仕事に、どのように取り組んできたか、以下に述べていってみようと思う。

■ポリシー1：自ら境界線を引かない

私が構造設計者として常に頭に置いている事の1つ目は、“自ら境界線を引かない”こと。構造設計に取り組む時に、「これは自分の業務や責任範囲ではない」とか「これは構造設計には関係ない」と考えて、自分で境界線を引いてしまえば、めんどくさいことを考えないでいいし、だいぶ気持ちも楽になる。でも、それでは本当にその“建築”を社会に送り出したと言えない。

我々の目指すこと、それは建築作品により、社会の夢を実現し、社会に貢献すること。構造設計はそのための手段にすぎない。「どんなことでも、構造設計業務に関係しないことはない」という意識を持って、前向きに取り組む。この気持ちを常に頭において建築に取り

組めば、“建築”の魅力が理解でき、仲間と力を合わせて達成感を感じることができると考えている。

■ポリシー2：仕事を面白がる

常に頭に置いていることの2つ目は、自分から“仕事を面白がる”こと。仕事を「嫌だなあ」とか「しんどいなあ」と思っていると、楽しくもないし、いい考えも湧いてこない。自分の仕事に興味を持って面白がり、今日、面白くない事や悩み事があっても、「明日になれば、きっと面白くなるで」と、頭を切り替えるようにしている。

これは私の尊敬する安藤忠雄先生の言葉の引用だが、「面白くない、と思うのは、その人がそう思うからで、自分で面白がり楽しむ気持ちさえあれば何とかなるし、明日は…と思えば、新たな知恵も湧いてくる」。

安藤先生には、いくつかのプロジェクトで一緒にさせていただく機会があり、プロジェクトに対する熱い想いや周りの人を引っ張っていくパワーに圧倒され、この言葉以外にも色々なことを学ばしていただいた。その中でも、“仕事を面白がる”ことはずっと頭にあり、それを実践してきているつもりである。

■影響を与えてくれたプロジェクト 海遊館とUSJ計画

私に大きな影響を与えてくれたプロジェクトが海遊館とUSJ計画である。

海遊館では、初めて大規模物件の担当者になり、現場の設計室に勤務し、構造設計者として自分の設計した構造体を現場で職人さんたちと一緒に作り込んでいく事ができた。工事現場で鉄筋屋さんと喧嘩しながら配筋の納まりを決めたり、鉄骨のファブの技術者と、「ああでもない、こうでもない」と徹夜で仕口を検討したりして、モノづくりのしんどさと楽しさ経験できた（写真2）。ここで、建築を実際に“つくる”こと、その中の構造設計者の役割の重要性を考える事ができたのは、自分にとって素晴らしい経験だったと思う。

もう一つのプロジェクトUSJ計画では、海外の技術者との協業を経験できた。プロジェクトの最初に、多くの設計者や技術者とハリウッドまで行き、アメリカ側からいろいろな



写真2 海遊館大水槽での記念写真

設計条件を提供してもらった。現地でアトラクションを体験（写真3）したりしながら、日本で実現させるための設計や施工法を検討した。そして、基準や設計法の海外との違いに戸惑いながらも、日本に新しいテーマパークを実現させるという強い意志をもって、対応することができた。



写真3 アメリカハリウッドにて

また、構造設計を10年経験し、初めて部下を与えられ、プロジェクトのリーダーとして対応した物件でもあった。それまでのように担当者として仕事をするのではなく、部下も含めたチーム全体の業務が効率的にできるよう組織や業務のシステムを整える事の難しさを感じたが、チームとしての達成感が個人の時の何倍も素晴らしいことを知ったプロジェクトでもあった。

■構造設計業務と働き方改革

構造も含め、建築の設計に100満点の答えは存在しない。設計者は、何度もシミュレーションを実施し色々な案を考える。それらの案の中から取捨選択して、最良の設計（と思われるもの）をつくりあげていく。自分として上手く設計できた、と思っても、また違う考えが湧いてきたりしてとりとめがない。色々な案を考えるのに、机に向かう必要もないし、時間にも制約はない。家族とショッピ

ングをしている時に、駐車場の鉄骨架構を見て、自分の設計している構造体の解決策に気づいたり、夜寝床に入ってから、頭の中で概略計算しながらいろいろなシミュレーションをし、新しい案を思いつく時もある。そういう時は早く構造計算をして、自分の思い付きを確認したくなってくる。

近年、建築の設計業務の働き過ぎが話題に上り、ワークライフバランスという言葉がよく言われる。確かに、前述したように建築設計に100点満点はないので、それをめざしていくまでも設計を進めていく事もできる。また、“建築”というものは“社会”、つまり普段の生活から切り離すことができないため、休日にショッピングやレジャーを楽しんでいても、そこにはその楽しさを提供する建築が存在し、つい自分の設計している建築と比較してしまう。

この気持ちがある限り、私も含めて、建築の設計業務の働き方改革は実現できないのではないかと、思う。

■新しい技術：AIやロボットの導入

建築の分野にも、最新技術：AI・IoT・ロボットの導入が叫ばれ、単純な事務作業へのAI導入や作業所でのロボット導入が一部実施されている。その中で設計業務は、創造的業務として、簡単にAIに置き換えられるものではないと位置づけられてはいる。でも、だからAIなんか関係ないと言っていたら、どんどん進んでいく時代の流れに取り残されてしまう。前述したように、設計者は、過去の建物の設計例を参考としながら多くのシミュレ

ーションを実施し、自分で最良と思う設計をめざし、新たな作品を創出していく。この過程の手助けとしてならば、AIの導入を考える事ができると思う。

弊社竹中工務店では、このシミュレーションを効率的に実施できるように、構造設計分野にAIを導入する取り組みを開始している（図1）。AIを導入することで、人間が調べるよりも多くの事例・情報が素早く調べられるし、過去の構造設計者たちのノウハウを機械学習で蓄積していく事で、構造設計者にAIからアドバイスができるようになる。そして、そこから新たな発想や設計も生み出されてくる、と期待している。

■おわりに

私は、“構造設計”という仕事が好きで、自分の設計している作品のことを考えている時が楽しい（苦しいときもあるが）のだと思う。でも、そんな余裕のない業務姿勢では、休みを取ろうとか残業時間を減らそう、と言ってもなかなか実現できそうもない。

建築は社会に貢献するためにある。我々は、頭を切り替え、時代の流れに乗ってAIやIoTに代表される最新技術を駆使して生活を楽しむ時間を作り出し、その楽しみの中で、建築が社会に貢献している実体験をしっかりと積み上げ、その体験の中から、社会に貢献できる新たな建築を生み出していくべきである。

“社会の一員として生活を楽しむ”、これを私の3番目のポリシーに位置づけ、今後業務を進めていきたいと思う。

（むらかみ りくた）

竹中工務店の「BRAIN」と、HEROZの「Kishin（棋神）」

構造設計システム



図1 構造設計AIの概要

5 次世代の現場管理者を 育てる立場から

仕事としての建設業

—これからの働き方とは、
そして現場管理者として
求められるものは—

七條 稔

株式会社鴻池組大阪本店
クレヴィアタワー大阪本町新築工事
工事事務所所長

七條 稔

昭和44年5月2日生まれ。
長崎大学工学部構造工学科卒業。
平成4年4月(株)鴻池組入社。
大阪本店 工事事務所勤務26年。
平成28年9月よりクレヴィアタワー大阪本町
新築工事 工事事務所所長

■はじめに

昨今テレビや新聞報道等で『働き方改革』や『ワークライフバランス』という聞き慣れない単語が飛び交っている。我々建設業（特に現場）にとっては縁遠い言葉だと認識していたが、政府においても『働き方改革実行計画』を策定し、建設業には5年間の猶予期間が設けられ、本格的に長時間労働の是正に取り組み始めた。長時間労働の改善を起点として、工期や単価等の様々な面で建設業としては大きな変革期に来ているのではないかと感じている。

その様な社会環境の中で、現場として変えて行かなければならない事や向き合っていかなければならない事は多数ある。しかしながら現場に携わる発注者・設計者・施工者・協力会社等それぞれ様々な立場や考えがあり、それらをすぐに変えて行く事は非常に困難である。働き方を変えて行く上では、それぞれが立場を超えて考え方を換え、受け入れるべきは受け入れて変える必要がある。例えると、大きな荒波に小舟に向かって行くような気の遠くなるような事なのかもしれない。

■なぜ仕事に建設業を選んだのか

建設業は我々が就職活動をしている頃から3K・5Kと敬遠されがちな職種であった。バブル世代であり、就職も超売り手市場であったが、なぜ建設業を選択したのかと言えば、物心ついた時から『ものづくり』に興味を持ち、自分自身の中で究極のものづくりは何だろうかと思案し続けた結果、辿り着いたのが建設業（建築）であり、ゼネコンの現場管理者であったからである。

入社当時を振り返ると現場は土曜も仕事、日曜も仕事、早出残業は当たり前であった。現場の業務は経験工学であり、仕事を覚える（技術を習得する）ためには時間を掛けなければ習得出来ないと思い込んでおり、現場事務所に泊って施工図を描くといった事は当前で、当時はあまり気にならなかった。『働き方改革』や『ワークライフバランス』などとは全く縁の無い世界であったと思う。しかし、それをいとも簡単に乗り越えさせてくれる非常に大きな魅力が現場には多数存在している事は紛れもない事実である。



写真1 現在施工中のクレヴィアタワー大阪本町新築工事。超高層であり安全に非常に気を遣う現場である

■建設業（現場）の魅力とは

建設業（現場）の魅力は、工事計画から着工、そして竣工に至るまで様々な方々と出合える事。現場では職人さん達の手作りによって建物が竣工するが、その手作りの過程を目の当たりに出来る事。そしてゴールとして『竣工した時の達成感を味わえる』事である。その瞬間が非常に嬉しく、施工中のしんどさなど全てが吹き飛んでしまう。他の仕事に就いていたらこの様な感覚を味わえたのだろうかと思う。この感覚が何事にも替え難い魅力となってしまう、今に至っている。

日本全国に様々な街があり、その街の中で現場があれば、『何が出来るのだろうか？』『どんな建物が出来るのだろうか？』と必ず街行く人々に注目される仕事である。そんな仕事には、なかなか出会えないのではないかと考えてしまう。

もう一点挙げるとすれば、人間の生活の基本を簡潔に表現した言葉として【衣・食・住】がある。どれも人間が生活をする上では欠かせない事が出来ない大切なものだが、その一つである『住』に携わっている事。建物を造る事は地図にも記載され、その場所に人々が集う事となり、微力ながら社会基盤の構築にも貢献している事。そしてその誇りを胸の中に抱く事が出来るという点である。『達成感と誇り』を建物が竣工するたび、心に抱き、味わえる仕事である事が建設業の魅力である。

■仕事では譲れない考えとは

現場を管理する上で、工程・品質・原価・安全の四要素があり、そのバランスが正常に取られている現場が良い現場だと常々考えている。この四要素管理は絶対に譲る事が出来

ない。その中でも特に譲れないのは安全と品質の確保である。

建物を造る現場では数多くの職人さん達が丹精込めて建物を作り上げている。その職人さんが、仕事が終わって毎日元気に「お疲れさん！」と言って帰って行く事。これは当たり前前の事だが、我々現場管理者が安全管理に対して少しでも気を緩めてしまうと、当たり前前の事が当たり前で無くなってしまい非常に辛い思いをしなければならない。些細な事故であっても、一度起きてしまうと現場自体が重苦しい雰囲気包まれ、悪い流れに流されてしまっているのではないかとこの錯覚に陥ってしまう。

作業効率を考えると安全が疎かになってしまう時が稀に発生する。作業効率＝原価になってしまう場合が少なからずあるからである。若手職員は作業効率や工程を優先してしまう場合もあるが、安全管理を疎かにしてはいけない。安全を疎かにすると取り返しの付かない事となり、管理者として大きな悔いを残してしまう。妥協のない安全管理は現場管理者として絶対に譲れないものである。



写真2 朝礼は始業前の職人さん達との安全管理のコミュニケーションの場

安全同様に、品質の確保も絶対に譲ることが出来ない。技術屋として仕事をしている以上、品質を疎かにする事は自分自身の存在意義を自ら否定している事と同じである。発注者・設計者・監理者と打合せを密に実施し、施工図を作成する。そして施工要領を遵守して日々の施工管理を行う。『ものづくり』の醍醐味である。

昨今、杭やその他様々な建物の品質が損なってしまうような事例がメディアに大きく取り上げられている。この様な事があると現場及び会社としての信用を大きく失い企業としての存続さえ危ぶまれてくる事態となって

しまう。だからこそ品質の確保も譲れないものである。そして品質の確保がいかに重要であるか、正しい施工法は何かを若い職員に教え引き継いでいく事も我々の重要な仕事である。

■仕事で社会との繋がりとは

建物が完成すればその建物に人々が集い様々な多岐に渡る活動を行う。その建物が街のランドマークとなれば人の流れを変えてしまう場合もある。住宅であればそこで次々と新しい人生が始まり、いくつものストーリーが生まれる。オフィスであれば生産活動が始まり富を生み出して行くなど、社会との繋がりには非常に大きなものだと感じている。現場を進めて行く上でも周辺の方々との縁は切っても切れないものである。ひとたび工事を始めれば騒音・振動・粉塵や工事車両の搬出入で周辺社会の様々な活動に迷惑をかける事は必至である。色々な意味で社会との繋がりには非常に大きなものであると感じる。

一方、建設業で何か起きてしまうと社会に多大な影響を与えてしまい、関わってしまった方の人生を大きく狂わせてしまう事がある。過去に起こった耐震偽装や杭の偽装等である。これらの事象から『建設業は信用ならん!』という認識をされている方々がおられるのも事実である。そういった逆風にも耐えて社会との繋がりをもって、そしてかつ社会貢献をしながら仕事を進めて行くのも建設業ならではの感じる。

■働き方改革の取組について

私が所長をしている『クレヴィアタワー大阪本町新築工事』は、地上30階建の総戸数181戸の分譲マンション建設である。建築の配属員は建築担当が私以下6名、設備担当2名の計8名である。日曜日は現場全休としているが、工程を考慮するとそれ以上の全休を確保する事は困難となっている。日曜を除く休暇は交替で土曜や平日に代休を確保して4週6休+αを確保しているのが現状である。今後、政府の『働き方改革実行計画』が遂行されれば現場でも週休2日となるのはそう遠い将来の事ではないと思う。現場に週休2日を定着させるためには、それに見合う発注者側の工期設定や工事単価の増額等、解決しな

ければならない問題が多々あるが、現場自体はどうなのかに焦点を当ててみたい。

まず何を変えなければならないか。過去の経験や実績にとらわれてしまいがちな私の様な現場所長の意識改革が必要な事は間違い無いと感じる。しかし、所長であるからこそ考え悩む事が多々ある。若い配属員にはもっと経験を積んでスキルアップをして欲しいがその時間が削られるのではないかと。スキルアップをしないまま立場だけが上がって行き、ゼネコンの管理者としての資質が落ちてしまうのではないかと。様々な事が頭を駆け巡る。

配属員個々の生産性を向上させなければならない事は間違い無いが、その方法が非常に難しい。我々はそれらに多くの時間を費やす事が可能であったからである。入社時は『バブル世代』や『新人類』と言われ、世間からは難しい世代とされていたが、今の世代は我々をもってしてもなかなか難しい世代である。かといって上司部下という人間関係は時代が変わろうと不変である。まずは根気よく彼らの目線で接する事を心掛けなければならないと強く感じる。

だが、個人のスキルアップに関して言えば結局我々がそうであった様に、その本人がどれだけ仕事にやる気を持って真剣に取り組むかではないかと思う。

■おわりに

我々に求められる事は、これからの建設業の将来を担う若い力の芽を摘む事無く大きな心で接し、現場で四要素管理をバランスよくこなす現場管理者を育て上げる事ではないかと感じる。

建設業にとって時代が大きく動いているのは間違い無いと思う。

(しちじょう みのる)



写真3 前回施工のジョグランデ岡本一丁目新築工事。宮水等、特に地下工事に苦勞した物件である。

6

塗料メーカーの
営業マンの立場からポリシーは
「人の役に立つこと」
—33年の営業経験を経て—

岡田全可

関西ペイント販売㈱
開発営業統括部長

岡田全可

昭和38年2月18日生まれ。

甲南高校、甲南大学経営学部を経て1985年（昭和60年）4月関西ペイント株式会社入社。自動車補修部門、自動車塗料部門・フィルム事業部門を経て、1994年より建築部門を担当。2006年4月より現職

■助け合い協力し合うことが必要

仕事をする上で、直近として最も感じている事は、何と言っても人の役に立つことだと思う。就職した当時は、こんな事は全く考えていなかったが、塗料メーカーの営業として33年を過ごさせていただいたこんにち、そんな風に感じる。

さまざまな人間が、同じ時間に同時に生活していくには、助け合い協力し合う事が絶対に必要である。両親に感謝するのと同じく、お世話になってきた周りの方々やこれからの世代を担って下さる後継者の方々に、いい意味で役に立てるようになりたいと感じている。

ご縁があって出会う機会を大切に、永年近くに居て下さる方を大切にする事がポリシーのようなものになっていると思う。

家族と友達と仕事仲間は、全て私にとってとても大切な存在である。

■仕事と人生どちらも楽しい

平日は生活の殆どの時間を仕事に費やす事から、自然に共通点が増えていると思う。人生そのものにおいても仕事においても、目標を立てその達成を目指して日々努力を重ね、結果を振り返るという事の繰り返しである。

相違点という意味では、仕事には土日とかOFFがあるが、人生にはOFFはない事だ。現役世代としては、仕事もそれなりに楽しみながら過ごしており、どちらも楽しい事とそうでない事が混在している。特に思い当たる相違点というのはない。

■仕事の魅力は世に役立つ新製品の開発

この仕事を選んだ理由は大変恥ずかしいが、学生の時の友人が当時就職活動をする意思がとて低かった私を、学校の先輩である当社の先輩社員のところに連れて行ってくれた事がキッカケだ。その先輩の話はと言うと、「サラリーマンというのは、給料くれて社会勉強させてくれて、しかも週末はちゃんと休みもくれるメッチャええもんやで」というものだった。

漠然と「学校の先生になりたいなあ…」くらいの超ユルユルの大学4年生だったので、「へえ～え、サラリーマンも楽そうやなあ」と

いう印象だけで、翌日に関西ペイントに電話をしたという次第である。私は何も感じていなかったが、世間の常識からすると既に変な出遅れていたようだ。

どんな会社とか、どんな業績とか、業界の中でどんな位置だとか、一切知らずにのんきに面接に望み、3回の面接を経て「10月1日来社したら内定」との連絡をいただき、そのまま入社となった。ほんとに良く採用して下さいと思う（写真1）。



写真1 入社当時の筆者

まあ、そんな私でも、最近は二次面接官をさせていただいており、「もし自分が今面接に来ていたらどう評価するだろう!?!」と考えてしまうくらい、今の学生さんは良く勉強をしておられビックリである。

仕事の魅力は、サラリーマンの一番の面白さである「個人ではできない、大きな資金を投資しての計画立案とその履行」と思う。細かい事ではいろいろあると思うが、一番はやはりメーカーとしては世に役立ち、一杯使っただけの新製品の開発ではないだろうか？（写真2）



写真2 筆者が手掛けた新開発の耐火被覆材

■潜在的な市場ニーズを汲み上げた製品を投入できれば元気が出る

仕事をしていて社会との繋がりを感じている事は、市場に求められている製品を開発している際の、市場のリアクションの良さである。非常に嬉しく、また期待が持てる思いで

一杯となる。恥ずかしながら、メーカーは市場ニーズの低いピンボケ商品を上市してしまう事もある。が、それでも一旦やり出すと牽引者が地位の高い人だと無意味にでもやり続けたりする。これは最先端で戦っている営業マンの心を折ってしまう…。そんな事があっても、潜在的な市場ニーズを汲み上げた製品を市場投入できれば、一気に企業として元気が出る。

あと、理解されていないと感じる事は、建築関係の場合は国土交通省さんの関係になるが、認定システムがグローバルと比べると異常な状態となっている事である。耐火被覆材等は、認定試験を受けるのに2年以上も待たなくてはならないものがある。新製品の開発に時間と費用が掛かるのは常だが、それでも認定作業に2年も待たされるシステムはとても合理的とはいえない。

また、海外のどの国よりも厳しい日本独自の判定基準が設定されており、近年試験条件や判定基準がより一層厳しくなっている。結果として品質は低いのに、過去に認定を取得したものしか使えない、という事態になる。また、海外での認定取得品の殆どは日本での試験を合格できず、海外メーカーの参入を阻む結果となり、コストアップ要因になっていると思う。これは非常に残念である。日本の建設コストを下げるためにも、良い点は継続し悪い点は改善するようにぜひとも見直しをしていただきたいと思う。

■信頼されることに喜びを感じる

私たちの主要なお客様は「ペンキ屋さん」と呼ばれている建築塗装業者様である。お役に立つことができ、可愛がって下さり仲良くしていただけることが一番嬉しい。企業と企業との関係を越えて、人と人の関係となる。人から信頼されることの喜びを感じられることは、仕事をしている上で一番嬉しいことだ。

■「働き方改革」は難しい問題

他社様の労働環境をよく理解していないが、「働き方改革」は非常に難しい問題である。例えば、信頼して下さっているお客様からご依頼をいただき、一生懸命資料を作って帰宅時間が遅くなってしまった場合、単に「残業

として扱われても困る気がする。とはいえ、周りから見たら「改革が必要だ」と見えるかもしれないし、簡単なことではないように思う。

大手広告代理店勤務で、前途有望な入社まだ僅かという若い女性が自らの命を断ったというニュースを聞いた時、本当に悲しい気持ちになった。だからもちろん改革は必要と思う。ただ、企業間でかなり労働環境が違うので、各々の環境を細かく確認する事が望ましく、十把ひとからげに片付けるのはいかななものかとも感じる。

一時、小学校の運動会でも「優劣をつけないために手を繋いで皆で一緒にゴールイン」という事が取り上げられたが、どう考えても同意できなかった。ちょっと違うが、「働き方改革」というテーマも、一歩間違えば大きく道を誤ってしまう危険性を含んでいるように思う。

■現実を受け止め対応策を考える

仕事のできる人に、仕事が集まって超多忙となる、というのは当たり前の事であり、現実起こる。それを「仕事を標準化する」と簡単に言うてしまうのはおかしい。現実を受け止めて、対応策を考えるのが大切であり、その職場ごとの異なる事情をよく把握理解してから、今後の対策を考えるべきではないだろうか。

突き詰めて言えば、能力の高い人は昇格させ、「地位と能力の合った組織にする」事が良いのではないかなと思う。ただ、人事は結局好き嫌いの要素が強く出る傾向があるので、その弊害が強い組織でこういう問題が大きくなるのではないだろうか？年齢や性別も含め、正しい評価をする事が一番大事ではないかなと思う。

■優秀で高いポジションの方に興味

良く儲かっている業界とそこの中での上位企業とそこで優秀と評価され高い給与とポジションを得ている方に興味がある。マスメディア系や化粧品業界等、社会に貢献し多くの利益を計上して、社員に高い水準の給与を支払えるとはどんな企業なのか!? それだけの価値のある人材とはどんな方なのか!?弊社や

自身と比較し、どこがどう違うのかを見極め、自身のレベルアップに繋げたい。

■成功するまで挑戦する人生を生きてみたい

人生をやり直せるとしたら、今度は違った人生を歩みたいと思う。どんな業界だとかいうのではなく、小さくても良いので起業し、当面は独身で結果が出るまでとにかく仕事に邁進する。失敗しても成功できるまで挑戦し続ける、というような人生を今度は生きてみたい。実家が宝塚市で小さな和菓子屋を営んでいたため、特にこういう思いが強いのかもしれない。幼少の頃、宝塚は歌劇だけでなくファミリーランド（残念ながら2003年8月閉園）という動物園兼遊園地があり、とても賑わった町であったのが懐かしく思い出される。

■2代前の社長に影響を受ける

仕事をするうえで、大きな影響を受けた人物は、弊社2代前の社長の小林正受先輩だ。当時は専務取締役で管理職研修の場で「利益と公正」というテーマで講演をしていただき、個別にお話を聞く機会にも恵まれ、小林先輩の生き様や仕事への姿勢・考え方に触れ大いに視野が広がったように感じた。今も尊敬できる大先輩である。

あと、最初の上司の山口稔先輩である。常識知らずの学生気分が取れない新入社員であった私に、優しく暖かく粘り強く指導して下さった。手の掛かる新入社員にも関わらず、一人の人間として真正面から指導をして下さった先輩に今も感謝の気持ちで一杯である。

(おかだ まさよし)



写真3 会社の仕事仲間と（左が筆者）

7 建築の保存再生の立場から

建築の歴史的価値を 社会化する

笠原一人

京都工芸繊維大学助教

笠原一人

1970年神戸市生まれ。

1998年京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。博士（学術）。2010-11年オランダ・デルフト工科大学客員研究員。近代建築史・建築保存再生論専攻。

共著に『近代建築史』（昭和堂）、『関西のモダニズム建築』（淡交社）、『村野藤吾の住宅デザイン』（国書刊行会）、『村野藤吾の建築—模型が語る豊穡な世界—』（青幻舎）、『建築家本野精吾展』（京都工芸繊維大学美術工芸資料館）ほか多数。2015年日本工学教育協会工学教育賞・日本建築学会賞業績賞受賞。

■はじめに

筆者は京都工芸繊維大学に勤務する近代建築史および建築保存再生論を専門とする研究者である。学外での仕事も多いが、研究者として大学に属しているからこそ成立するボランティア的なものばかりで、それらは社会的にビジネスとして成立しているとはいえない。また「休日」や「残業」、「定時退社」などという概念はなく365日慢性的に働いている。話題の「働き方改革」など無縁な世界であり、「ブラック」の極みかもしれない。

したがって、編集部から提示された今回の特集のテーマである「日常の仕事の進め方や時間の使い方等々」としての「働き方」を云々できるような立場にはないし、特に不満もない。提示された「設問」に答えるのは難しい。代わりに、筆者が携わっている歴史的建築物に関する仕事を紹介し、それが今後ビジネスや新たな職能として成立する可能性について考えてみたい。

■近代建築史

筆者の専門の1つは近代建築史である。論文や著書としては村野藤吾や武田五一、本野精吾、上野伊三郎など、関西を拠点にした20世紀の建築家や建築についての研究実績が多い。中でも村野藤吾については、京都工芸繊維大学美術工芸資料館が図面資料を5万点以上所蔵しており、その調査・研究や展覧会「村野藤吾建築設計図展」を担う村野藤吾の設計研究会の事務局を務めているため、研究活動の中心的なテーマとなっている。

「村野藤吾建築設計図展」の開催は、1999年から2017年までに14回を数える（2015年日本建築学会賞業績賞受賞）。展覧会は、準備や図録の作成などに膨大な手間と時間が掛かる^{（註1）}。しかし展覧会開催によって発掘される資料も多く、図面資料から明らかになることも数知れない。学生が参加することで教育効果もある。建築史研究の成果を社会化する上で展覧会は今や重要な方法である。

図面資料そのものが社会に貢献する機会も増えている。2017年1月には、北九州市の日鉄住金ロールズ工場に、村野藤吾が設計し1941年に竣工した工場の建物が現存していることが判明し、朝日新聞のスクープ記事と

なった^{（註2）}。筆者は図面資料からこの建物が村野作品であることを「確認」し、建物の評価を行い記事に貢献した。建築アーカイブには、未知の情報が多数眠っている。その情報を社会に対して開くことも筆者の仕事である。

DOCOMOMO Japanや日本建築学会での活動も挙げられる。前者は、1988年にオランダで設立されたDOCOMOMOの日本支部であり、2000年に設立された^{（註3）}。筆者は幹事の一人である。毎年優れた日本のモダニズム建築を選定したり、その建物の保存活用要望書を提出したり、モダニズム建築の価値を社会に伝える役割を果たしている。後者については、筆者は日本建築学会近畿支部近代建築部会の主査を務めている。関西の優れた近代建築が解体の危機に瀕した際、保存活用要望書を作成し、所有者に建物の価値を伝え保存活用を要望している^{（註4）}。

これ以外にも、NHK文化センターや大阪のClub Tapが主催する近代建築の見学講座やツアーの講師を定期的に務めている。前者の講座は毎月関西地方の優れた近代建築を1、2件訪ね解説を行うもので、東京など遠方からの参加者もある。後者は建築や美術、庭園の講座を企画している組織であり、年に2、3回のペースで村野藤吾ツアーや武田五一ツアーなどの講師を担当している。いずれも建築の歴史的価値やその楽しみ方を広く一般の人々に伝え共有する仕事だと言える。

■建築保存再生論

筆者のもう一つの仕事は、近代建築の保存再生に関わるものである。京都工芸繊維大学大学院では、2015年に近代建築の保存再生の考え方や方法を学ぶ建築都市保存再生学コースを設置し、東京駅の再生を主導した建築家の田原幸夫氏が特任教授として着任した。以来、筆者と共同で同コースの運営を行っている。

「建築都市保存再生プロジェクト」という実習形式の通年の授業では、現存する近代建築を題材に、前期で建物の歴史の調査を行い評価し、後期でその建物の改修設計を行う。2017年度は神戸女学院ケンウッド館、京都市美術館事務棟、旧喜多邸を題材に取り組んだ。また「建築都市再生学特別講義」では、建築の保存再生に取り組む学外の専門家による講

義やシンポジウムを行っている。シンポジウムは、これまで煉瓦造、鉄筋コンクリート造、木造などをテーマとしてきた^(註5)。

学外でも建築の保存再生の活動に取り組んでいる。2015年には住宅遺産トラスト関西を設立し理事に就任した^(註6)。この会は、建築家や建築史研究者、弁護士、不動産業者など十数名が理事となり設立したもので、解体されるかもしれない優れた近代住宅の売却や購入といった「継承」、そして活用のお手伝いをする組織である。「リビング・ヘリテージ・デザイン」をコンセプトに、ヘリテージ・マネージャーのような技術的支援だけではなく、法律や法規、歴史的価値、不動産価値などの価値から総合的にマネジメントを行うヘリテージ・コンサルタントである。

京都の旧喜多邸（藤井厚二設計／1926年竣工）はすでに「継承」に成功し、現在京都の栗原邸（本野精吾設計／1929年竣工）や神戸の岡本の洋館（木子七郎設計／1923年竣工）などのお手伝いを続けている。日本では、歴史的建築物が解体されてしまうことが多いが、そんな建物に居住したり活用したりしたい人もいはずだ。購入者を探し出すことで、歴史的建築物を保存活用しようとするものである。

■建築史研究や建築保存活用はビジネスになり得るか

このように筆者の仕事は、建築史の知識や情報に基づいて歴史的建築物の価値を社会に伝え、人々の関心を高め、保存活用や保存再生に繋げるといえる「建築の歴史的価値を社会化する」ことだと言える。これは現在、大学や研究機関に勤める研究者が、本業としてではなく副業的に、そしてボランティアで行うのに留まっているが、今後はビジネスとして成立させることを目指すべきだ。いわゆる金儲けをするわけではないが、恒常的に建築の歴史的価値が社会に広く伝えられ建物の保存活用が行われていくには、ある程度の利益が生じるビジネスとなる必要があるからだ。

展覧会や建築の見学講座、見学ツアーは、ある程度の利益が見込める事業である。現状の日本では、単独の事業として成立し維持できるほどではないが、アメリカのシカゴには、ライトやミース、高層ビル群など近代建

築の名作が建ち並んでおり、連日多数の建築ツアーが開催されて観光客で賑わっている。大阪の「生きた建築ミュージアムフェスティバル（イケフェス）」^(註7)の成功も、そうした可能性を示唆している。条件が整えば、ビジネスにすることは不可能ではないはずだ。

歴史的建築物の保存活用については、優れた改修デザイン能力を持つ建築家の育成や、住宅遺産トラスト関西のようなヘリテージ・コンサルタントがビジネスになるかどうか、が鍵になるだろう。兵庫県で2001年から講習が始まったヘリテージ・マネージャー（以下「HM」）が、近年「建築の歴史的価値を社会化する仕事」を担い始めている。HMは今や全国で約3,900人を数える^(註8)。ただHMは、建築士の延長で技術者の側面が強い。それに対して住宅遺産トラスト関西は、歴史研究や法律、不動産の視点も加えた総合性が特徴である。

現在、文化財保護法の改正を目指して、文化庁や文化審議会文化財分科会企画調査会で準備が行われている^(註9)。従来以上に歴史的建築物の活用を重視する制度として改正されるようだが、その中で、国に代わって地方自治体が歴史的建築物の「活用計画」を作成し、地域やコミュニティが一体となって歴史的建築物を活用することが目指されている。継続的にこうした事業を担う主体として、ヘリテージ・コンサルタントが必要になる。

建築保存活用大国であるオランダでは、ヘリテージ・コンサルタントがすでにビジネスとして成立している。前述の建築都市保存再生学コースの特別研究会で今年2月にパネリストとして招待したポール・ミュルス氏（Paul Meurs／SteenhuisMeurs共同主宰／デルフト工科大学客員教授）はその一人である^(註10)。国や自治体などから依頼されて、都市計画に先立って歴史的建築物の調査を行い、歴史的価値を評価し、保存活用計画を立て、それをもとに都市計画を行い建築家が改修設計を行っている^(註11)。日本でも、「継承」の成功実績が積み重なれば、ビジネスとして成立する可能性が見えてくるはずだ。

■おわりに

かつての建築史研究者は、いわゆる指定文化財の審査会の委員に就任することが、数少

ない社会との接点であったかもしれない。しかし今や、あらゆる建物に歴史的価値が見出され始めており、建築史研究者の役割も広がっている。建物の歴史的価値を社会に開き、歴史的価値と活用の両立をマネジメントすることが、継続的かつ総合的な新たに職能が必要になる。筆者の大学での研究・教育や社会での実践的な活動が、そんな新たな職能の確立に貢献することを期しながら、今後も活動を続けたいと思う。

（かさはら かずと）

■註

- (註1) 村野藤吾についての展覧会は、『村野藤吾建築設計図展カタログ（1－11）』京都工芸繊維大学美術工芸資料館発行、『村野藤吾のファサードデザイン』、『村野藤吾の住宅デザイン』、『村野藤吾とクライアント』（以上、国書刊行会発行）、『村野藤吾の建築一模型が語る豊饒な世界一』（青幻舎発行）を参照。
- (註2) 『朝日新聞』、2017年1月9日、西部本社版、朝刊、第1・31面
- (註3) <http://www.docomomojapan.com/>
- (註4) 日本建築学会（近畿支部）が発行する保存活用要望書は、<https://www.aij.or.jp/>にすべて掲載。近畿支部の保存活用要望の活動については、笠原一人「近代建築の保存活用要望活動」、『日本建築学会近畿支部創立七〇周年記念誌』、日本建築学会近畿支部、2017年、を参照。
- (註5) 建築都市保存再生学コースのシンポジウムや特別講義の様子はKYOTO Design LabのHP (<http://www.d-lab.kit.ac.jp/>) のYou Tubeで公開。
- (註6) 住宅遺産トラスト関西 (<http://hhtkansai.jp/>) を参照。なお、東京の住宅遺産トラスト (<http://hhtrust.jp/>) とは別組織だが、相互に連携している。
- (註7) 生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2017 (<https://ikenchiku.jp/>) を参照。
- (註8) 2017年10月集計の「ヘリテージマネージャー養成講活動習ネットワーク施設状況一覧」（全国ヘリテージマネージャーネットワーク協議会運営委員会）による。
- (註9) <http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/kikaku/h29/index.html>
- (註10) ヘリテージ・コンサルタント事務所SteenhuisMeurs (<https://www.steenhuismeurs.nl/>) を参照。
- (註11) オランダの歴史的建築物の保存再生については、笠原一人「オランダ・リノベーション建築の現在」『新建築』2011年4月号、新建築社、笠原一人「建築保存のポリエドールヨーロッパに学ぶリノベーションの技法―」『建築ジャーナル』（全24回）、2012年1月－2013年12月号、建築ジャーナル、笠原一人「『クロノカオス』に抗して、いかに歴史的建築物に向き合うべきでしょうか?」、『10+1 web site』、2017年1月、(<http://10plus1.jp/monthly/2017/01/issue-08.php>) を参照。

建築と不動産の あいだで働くこと

ー変化のマネジメントー

高橋寿太郎

創造系不動産

高橋寿太郎

1975年 大阪府生まれ。

2000年 京都工芸繊維大学大学院 岸和郎研究室を修了。2007年まで古市徹雄都市建築研究所で建築設計監理業務を歴任。2011年まで都内の不動産総合会社で開発、売買、賃貸管理、不動産コンサル等幅広く不動産業務を担当。2011年創造系不動産を設立。建築家とのコラボレーションに特化した不動産コンサルティングを開始。

著書に『建築と不動産のあいだ』。雑誌「KJ」にて『与条件と未条件』を連載中。関東学院大学での「建築学科の不動産学基礎」のプログラムを提供や、創造系不動産スクールの運営を通じて、教育活動を行う。

一級建築士・宅建取引士・経営学修士 (2018.3修了予定)

■創造系不動産とは

「建築と不動産のあいだを追究する」というコンセプトを掲げ、2011年に設立された創造系不動産は、6年が過ぎ、社員も少しずつ増え13人になった。私たちは建築設計事務所と不動産会社の両方の実務経験を経て、隠れた「顧客の価値」を発見した。それは偶然だったと思う。この価値を、顧客と建築設計事務所に広く提供する新しいビジネスモデルが、創造系不動産という組織である。

■建築と不動産のあいだを追究する

建築物を構想し、人間や都市に影響を与える建築設計技術と個人や法人の所有権等を高度に取引する不動産の技術は、それぞれが専門性を高めつつ、高度情報化社会へ突入して久しい。しかし建築と不動産の専門家同士の関係性は希薄で、むしろ分断されており、異なる価値観や業務フローを固持している。

問題は、その分断が顧客の建物づくりに大きな障壁になっていることだ。その状況を改善するため、私たちは設計事務所とコラボし、サポートすることに特化した不動産会社になった。私たちは設計事務所から依頼を受け、顧客の土地探しや不動産売買、ファイナンスプランや税務、ローンや資金調達、登記や各種保険のサービスといった業務を一手に引き受けた。構造や設備のように、設計事務所から相談できる不動産の専門集団がいれば問題は解決する（詳しくは『建築と不動産のあいだ』学芸出版社2015年）。

創造系不動産のフロー（VFRDCM：図1）



図1 建築不動産フロー。設計者が不動産を補助し、不動産コンサルが設計フェーズを支える。双方がこのような波形の相関関係を保ちつつ建て主を導く

は、その2つの専門性を重ね合わせ、顧客への提供価値を飛躍的に高める方法論である。その点で、創造系不動産は常にイノベティブであろうと努める。それは完成する建築空間やプロダクトについてではない。既に多くの人が指摘するように、個別の建築物や空間だけを目指しても、現代の消費スピードは驚くほど速く、継続的な価値を生み出し続けることができない。だから我々はビジネスモデルやマネジメントに常に注力している。そしてこれからはさらに、業界構造的なイノベーションに挑戦しなければならない。すなわちこのビジネスフローの普及である。

■あいだから実現できる仕事

その試行錯誤から生まれた創造系不動産の仕事をいくつか紹介したい。

●コエドビール新工場（設計：建築再構企画、他）

川越を拠点とする「コエドビール」は、日本を代表するクラフトビールメーカーになった。その新工場に選定されたのは、築38年の1万㎡を超える企業研修施設である。大学の校舎のような研修施設に、多数の巨大タンク（写真1）が埋め尽くされる壮大なプロジェクトだった。設計を担当した建築再構企画の佐久間悠氏は、独特な法的アプローチで、リノベーションを可能にした。

創造系不動産は不動産開発コンサルの立場から「チーム編成」という業務を担当した。



写真1 外壁を解体しタンクの搬入

当初はリノベーションか新築かの方向性を決めなかった。佐久間氏をはじめ複数の設計士が、並行して設計業務に当たり、課題を共有しながら方向性を変えて行く「同時並行設計」を考案した（図2）。このプロセスで得た知見は、その後の我々の考え方を大きく変えた。



図2 同時並行設計フロー。多くのシーンで伝統的な設計コンペ形式が機能しない。その課題を改良した、経営判断を重ねて行く方法

●イマケンビル（設計：ヤマサキアトリエ

1階店舗コンサルティング：グランドレベル
テナント内装設計：石井大吾＋ブルースタジオ）

東京墨田区、両国森下エリアに位置する、築56年の鉄筋コンクリート造3階建てのビルである（写真2）。1棟フルリノベーションを終えた1階には、「喫茶ランドリー」という一風変わった空間が生まれた（写真3）。街に開いた喫茶空間には、洗濯や家事ができるスペースが隣接し、自然と住民同士の交流が生まれ、話題を呼んでいる。グランドレベルの田中元子氏と大西正紀氏は、1階路面のコンサルティングを通じて、地域住民によるまち



写真2 イマケンビル全景



写真3 イマケンビル1階「喫茶ランドリー」

づくりの理想形を探索する。

計画当初に遡る。設計事務所ヤマサキアトリエの山崎裕史氏と創造系不動産は、空き家となったこの建物の再生事業計画を立て、金融機関との打合せを重ねた。街をくまなく歩き、その営みや景色、賃料水準や人口動態、そしてそれらの変化を分析した。新築に建て替えば、銀行融資も受けやすく、事業としては進みやすい。実際、多くの金融機関やハウスメーカーからのオーナーへの提案は、全て建替えだ。しかし本当にそれで良いのか。

オーナーと山崎氏は将来の市場の変化を冷静に分析し、古い建物が持つ独特の価値を見極め、一棟フルリノベーションに舵を切った。

■変化のマネジメント

こうした設計事務所と不動産コンサルタンのコラボレーションプロジェクトは、日本では必然的に増加していく。冒頭の通り、これらは作り上げられる建築空間そのものではなく、ビジネスモデルやマネジメントのイノベーションを目指している。それは「提供価値」「コスト構造」「業務フロー」「販路」「人材」等のマネジメントの構成要素の一部または全部において、いかに新しい視点を発見し実行することである。ここからは少し「人材」について話を進めたい。

創造系不動産では働くすべての人（正社員、パートタイム、ダブルワーカー、顧問に関わらず）を「メンバー」と呼び、メンバーの企業における在り方や位置づけが明文化されている。全員で目指すビジョン、これから引き起こす改革、そして「人」が最上位の資産であることと、それらの意味。またメンバー同士を大切に、議論し切磋琢磨すること、一方的な意見は避けること。さらに残業を減ら

す短時間の成果や、勤怠管理について。少しずつ加筆され6ページになった『働き方』は、3か月に1度は全員で読み合わされ、浸透定着に取り組んでいる。これは建築や不動産業界では企業規模によらず珍しいが、理由がある。

メンバーは実は全員が建築設計事務所や建築学科出身である。今のところ、アトリエ事務所が半分、大手組織設計事務所が半分。私自身がそうだが、メンバーはものづくりの専門分野から働き始め、これからの日本で始まる人口構造や統治形態の大変革を察知し、大いに悩んでいる。飛躍を目前にし、自分達が人生を賭けてやるべきことと、やりたいことの機会探しの途上である。本格的な変化に備えなければならない。これからの企業はそうした不安定な立場にある彼らを、丸ごと受け入れる存在でありたい。だから繰り返し会社の方針を約束する。そしてそれらを満足させるインセンティブ（報酬・報奨・教育・休暇・立場）を用意できるように、会社側が変化する。もちろんこれら施策は、自社の特性や経営者の理念との整合性が求められる。

そのために、まずは経営者が、企業の存在理由が「価値提供」と「雇用の創出」であることを、胸を張り言う。そして全力で働きがいのある環境に取り組み続ける他はない。

■就業慣習のアップデート

一方で建築と不動産業界を広く眺め、他の業界と比較したとき、専門性から生じる独特な就業慣習が伝統的に守られ、人の分野への関心が低い。そのためか「昨今の働き方改革をどう導入するか」と表面的に始めたくなる。働き方改革の目的を要約すると、慣習に囚われず労働人口を増やし、生産性を高めることであるが、並行、または先行して人材マネジメント施策を思案し、実行させるほうが良い。

そしてクリエイティブな、または職人的な業務習熟の利点は承継させたい。しかし今までと同じやり方や、時に技を見て覚えさせるような方法が通用しないこともある。私たちも、フェーズの変化を認めなければならない。

（たかはし じゅたろう）

9 ハウスメーカー 設計士の立場から

家づくりを任せて もらえる設計士に

古山太一

大和ハウス工業株式会社
奈良支店住宅設計課

古山太一

1982年生まれ。広島県出身。
2005年 広島工業大学卒業。
大和ハウス工業株式会社入社。
主として企画設計を担当し現在に至る。

■はじめに

住宅着工戸数が減りつつあり、市場拡大が難しくなっている今、働き方改革によって仕事の効率化が求められている。ハウスメーカーは業務を分業化し効率化を図っている会社が多い。設計業務に関しても同じで、本来、設計士が一人で行う業務を細分化し分業化する事によって効率化を図っている会社が多くみられる。

大和ハウス工業でも支社・支店によって体制の違いはあるが、設計業務を細分化し、業務の効率化を図る事によって、より精度の高い仕事を可能としている。精度を高める事によってお客様に満足度の高い住宅を提案できるように努めている。今回、ハウスメーカーの取り組み体制やハウスメーカー設計士の働き方を紹介する。

■プランの提案を行う重要な役割

営業が見つめてきたお客様と打ち合わせを行い、商談の中で家づくりの夢や要望を形にし、プラン提案を行う業務を主としている(企画設計)。他メーカーと競合する事も多く、こちらの提案内容や建設コストによって会社を選んでいただけるかどうかが決まる重要な役割であり、どちらかと言えば営業職に近い職種かもしれない。

設計業務を分業化する事は、お客様との商談時間やプラン作成の時間などに業務負担割合を割くことができ、効率よく精度の高い提案を可能としている。

「設計業務の分業化の内容」

- ・企画設計：お客様との商談を主とする。
- ・実施設計：図面作成の業務を主とする。
- ・生産設計：構造図の作成を主とする。
- ・申請設計：申請図書の作成を主とする。
- ・積算：見積もり、予算の作成を主とする。
- ・インテリアコーディネータ
- ・内装、設備の打ち合わせを主とする。
- ・仕切り：部材の拾い出し、発注 etc

■業務の流れ

業務の流れは次のとおりである。

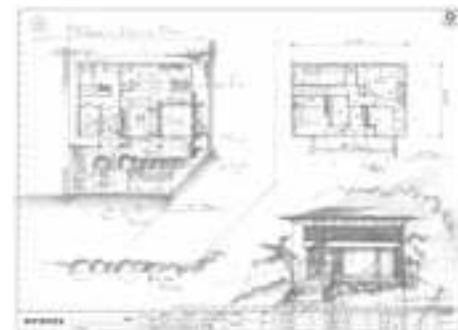
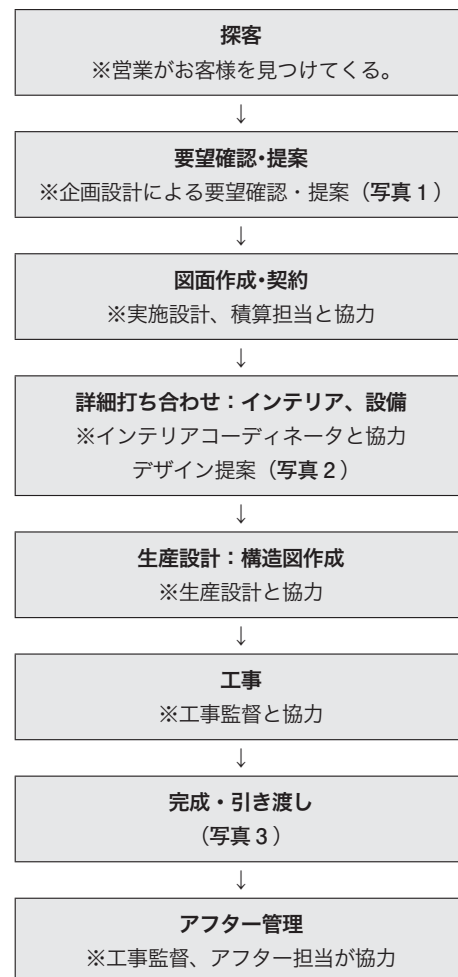


写真1 商談中に描いたプラン

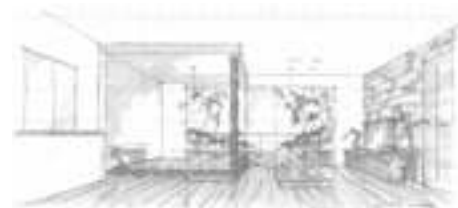


写真2 商談中に描いたパース



写真3 完成写真

■ハウスメーカーはスピードが命

土・日曜日は全日商談となる事が多く、午前、午後と別々のお客様と商談を行う。平日は商談が少ないため営業と同じく火・水曜日が基本休みとなる。

月曜日は前日の商談のお客様の打ち合わせを行い、火・水曜日の間に実施設計に図面作成してもらう準備を行う。木・金曜日は実施設計の図面のチェックやサプライヤーとの打ち合わせなど実務的な業務が多い（図1）。

ハウスメーカーの特徴はスピードである。要望を確認した日から1週間でプランを作成・提案し、次の週には金額を提出し、1週間ピッチで商談を進める場合が多い。多忙で毎週打ち合わせの時間を取れないお客様、事情により早く建物を完成させたいお客様にとっては、スピード力、対応力を魅力と感じていただく方も多い。早い方だと、お会いして3カ月後には着工される方もいる。早く決断が出せるように提案資料や図面などの判断材料を早期に提供できるのは、分業化する事によって効率を上げ、スピード力のあるハウスメーカーの強みではないだろうか。

■お客様の数や建ててきた家の件数は私の誇り

「形に残る仕事がしたい。」という漠然としたイメージで大学では建築デザインを専攻した。大学で出会った教授や建築家の方々の影響により、大きな規模の建築物では感じにくく、人の喜びや信頼を肌で感じ易い戸建て住宅の設計に興味が生まれた。学生時代に設計事務所で勉強させていただいた事もあり、私自身も設計事務所に勤め、いつかは独立できたらと思っていた。しかし、一生のうちに会える事のあるお客様の数を考えると、より多くの人と会う機会があり、多くの家を設計できるハウスメーカーの設計士に魅力を感じハウスメーカーに勤める事となった。ハウ



写真4 プレゼントしたパース

スメーカーの魅力は、個人事務所では経験できない数のお客様と出会い多くの家を設計できる機会に恵まれている事と考える。今まで会ってきたお客様の数や建ててきた家の件数は私の誇りでもある。

■常に新しい事を取り入れ、チャレンジし続ける

入社したての頃は、設計事務所やゼネコンに就職した友人も多く、ハウスメーカーである事や、型式適合認定の枠にはまった考えに後ろめたさを感じていた事もあった。そのうち多くのお客様と出会い、競合し、私の提案を気に入って建てていただいたお客様が続くと、ハウスメーカーの設計士という枠にこだわりすぎていたのは自分だけだった事に気付かせてもらった。それから、ハウスメーカーという枠にとらわれず、一生に一回であろう家作りをまかせてもらえる、ただ一人の担当設計士になる事を心掛けている。

競合相手が誰であろうと負けない提案を行う気持ちを持ち続け、常に新しい事を取り入れ、チャレンジし続ける事によって成長し工業化住宅の枠を超えた住宅を建てたいと考える。またお客様に選んでいただくためには、

建物を設計するというよりは、住まい手の暮らしを描く設計士である事を忘れないでいる。

■多くのお客様に満足していただき誰よりも多く喜んでいただきたい

設計という仕事のやりがいは、「お客様に喜んでいただける事」と考える設計士は多いのではないだろうか。私は誰よりも「多く」のお客様に満足していただき誰よりも「多く」喜んでいただきたいと考えるただの欲張りなのかもしれない。私は商談中にその場でプランやパースでイメージを伝える事が多い。たまに「家が完成したら記念にパースを一枚描いてくれないか?」と言われるお客様もいる。お住まいになり何年か経っても私が描いたパースが玄関に飾ってあると、喜んで住んでいただいていると感じうれしく思う（写真4）。

■おわりに

会社によって、業務内容や体制は違うため、紹介した内容は一例である。しかし、いまだハウスメーカー設計士の地位が低い会社は多いのではないだろうか。着工戸数が減りつつある中、営業力だけで契約が決まる時代は終わったと考えてもいい。お客様がハウスメーカーに求めている品質と信頼は当たり前だが、建築家に負けない設計士の提案力も問われる時代になっていると考える。

まだ若輩者の私がこんな事を書くのもおこがましいが、ハウスメーカーの設計士が設計する家が有名建築雑誌に載る時代がくればと思っている。（こやま たいち）

2018/February

	1日 Thu	2日 Fri	3日 Sat	4日 Sun	5日 Mon	6日 Tue	7日 Wed
9:00	会議	プラン作成	I様商談 (プラン提案2)	K様商談 (初回、NW)	プラン作成 プレゼン作成依頼	休日	休日
12:00	着工前打ち合わせ サプライヤー打ち合わせ	K様宅訪問 (生活・現場確認)	Y様商談 (要望確認)	A様商談 (プラン提案1)	社内会議 プラン打ち合わせ		
18:00	図面作成	図面作成	O様商談 (設備打ち合わせ)	プラン作成	実施設計依頼		

図1 1週間のスケジュール

10 地球と共生する生き方を模索する立場から

建築設計の領域拡張と仕事の価値

—これからの社会とエネルギー—

澤 秀俊

澤秀俊設計環境 代表

澤 秀俊

1983年3月7日岐阜県高山市生まれ。
2001年斐太高校卒業、2005年名古屋工業大学卒業、2006-07年ミュンヘン工科大学、2009年東京工業大学大学院修士課程修了。
2009-11年IHA Tokyo/Parisを経て、2011年テラード・デザイン研究所共同設立。
2013年京都府綾部市の古民家へ移住、設計活動の傍ら自然農の畑を実践。2014-17年ヴォ・チョン・ギア・アーキテクト、ベトナム、パートナー。2018年飛騨高山へ拠点を移し、澤秀俊設計環境を設立。

■自分の仕事は果たして社会を豊かにするものか

自分が大切にしていることの一つに、「自分が関わっている仕事」「社会」をより豊かにするものかどうかがある。ここでいう「社会」とは、一個人、その集合である家族から、市町村、自治体、国、ひいては大自然や地球環境といった小さなものから大きなものまでを包含したものとする。簡単に言えば、個人の営みの総体が私たちの住む地球環境の一部であることを、人間が念頭に置いて生活すれば自ずとその暮らし方は他者を敬い、自然環境に負荷が少なく、地球と共生するものを志向するようになると思う。自戒を込め、自分の設計活動は果たしてその一助になっているかを日々意識的に自問するようにしている。

■人生の価値と仕事の価値とは

自分がこの時代に、この地球という星に生まれてきたのは、何かしら意味があつてのことだと考える。各分野で転換が叫ばれる激動の現代において、仕事をする価値というのは、前項目で述べたような大きな意味での「社会」へ寄与できるかどうかにあると考える。その過程において様々な事に直面し、その都度学びを得て自己成長していくこと、探求し続けることにある。究極的に言えば、周りの人・モノ・環境に対する思いやりの心、他者への愛に生きることができるか、を学ぶことが人生の目的であり価値のような気がしている。

■社会を連関するエネルギーへの興味

「社会」とのつながりと聞いて、思い浮かぶのは、この社会の様々なものをつなぎ動かしている動力、エネルギーのことだ。エネルギーとは社会の血液のようなものだと考えており、広義的に捉えれば、熱や電気などの物理的なもののみならず、お金も仕事やモノを動かしているのでエネルギーと言えるし、また、建築も物質エネルギーの集合体とも言える。

最近の私の興味は「自然エネルギーとその連関が建築空間をどのように変えていけるか」という事にある。日本の国土は森と豊富な水など資源に恵まれた国である。この点では、熱帯雨林を採り尽くし、欲しくても木材が手に入りにくいベトナムとは真反対の状況であ

る。その豊かな資源をエネルギーとして活かさないという選択肢はないと思う。現在、私が拠点とする岐阜県高山市は、その9割以上が森林であるにも関わらず、一冬に人々が暖房費として灯油に費やす金額は11億円あまりに上るという。たかだか人口9万人弱の地方都市でそれだけの化石燃料が使用され、そのお金が中東へ流れているのだから、日本全体で言えば、気も遠くなるような膨大な金額であろう。身近にある資源をエネルギーとして利用することは急務だと言える。

■自然エネルギー活用に向けての活動

4年前に飛騨高山の有志により設立された自然エネルギーNPOに、私も事務局員として参加させてもらっている。そこでの主な活動の一つに「木の駅プロジェクト」(写真1)というものがある。山から切り出した間伐材を丸太は製材・薪・チップに、大きめの枝は家具、葉はアロマオイルへ、と各業者へ分別し出荷する。そこで得たマージンを市内の協賛店で使える地域通貨「エネポ」(写真2)として発行し、参加者に手当として還元するというものである。この地域通貨は、使える店が市内の加盟店に限られているため、市外へは流出せず、仕事とサービスが市内で循環していくことになる。これは何も私たちの団体が初めての試みではなく、全国各地数十カ所の



写真1 木の駅プロジェクト作業風景



写真2 地域通貨「エネポ」

団体により既に実践されている運動であり、この活動がより盛んになればなるほど放置されていた里山に手が入り、地域経済が活性化されていく。衰退の一途を辿ってきた日本の林業への一つの打開策、資源の活用、地域経済活性化という意味で非常に大きな可能性を感じている。これは一つの例で、他にも山間における小水力発電やバイオマス発電など、地域の農林水産業等と連携させていけるものが多々あり、今後はそれらの可能性も探っていきたいと考えている。

私は建築家として、こういった取り組みが人々の生活の営みのみならず、建築を取り巻く環境にどのような新風を吹き込んでくれるのか、ワクワクしながら日常の業務の傍、これらの活動に関わっている。



写真3 収穫し分別されたヒノキ葉。アロマオイルの原料になる。

■「働き方改革」は必然、個人の乱れは社会の乱れ

建築にまつわる仕事は往々にして激務というのが、業界にいる私たちの一般的な共通認識であると思う。忙しさ故に家族や恋人と過ごす時間、一人で余暇を楽しむ時間がない、コンビニなど外食に頼りきりで食生活も乱れ、睡眠不足も相まって不健康、人間的な生活が送れない、などという話は何も日本の建築業界では珍しい話ではない。実際、かつての自分もそういった環境に身を置いていた経験があるのでよくわかる。このように自分が整っていないのに、個人の集合体である“社会”を整えていくことなど不可能である。このような悪循環をいかに断ち切り、好転していけるか自分も模索し始めているところである。

■座禅を取り入れたワークスタイル

IT産業が盛んなシリコンバレーでは、マイ

ンドフルネスという瞑想法をワーキングタイムに取り入れる企業が多数あると聞く。ITエンジニアはとて多くの情報を扱うので、いち早くそれを取り入れたというのも頷ける。

私が昨年まで在籍していたベトナムの設計事務所、「ヴォ・チョン・ギア・アーキテツ」(VTN)においても、朝夕各1時間、合計2時間の瞑想時間が確保されており、定時になるとスタッフ全員で座禅を組む(写真4)。これは代表であるギア氏の発案によるものだが、確かに呼吸を整えて心を落ち着かせ、脳内をリフレッシュさせると、どんなに忙しい時でも平静な心を保つことができ、ストレスを軽減できるのを実感する。心が落ち着いた状態になるため、座っている時に良いアイデアが浮かんでくることも度々あった。



写真4 ベトナムのVTN事務所での座禅風景

■百姓に学ぶ生き方

色々な仕事ができるから「百姓」と呼ばれるようになったと聞いたことがあるが、自分の活動の領域を決めつけず、広げていくことも「働き方改革」のヒントになるのではないと思う。私自身の課題の一つに「デザインの領域を広げていく」ことがある。例えば、米や野菜作りを暮らしの一側面として捉え、建築単体のみならず、耕作放棄地を活用し畑を楽しめるような環境づくりまでを設計範囲とする。また、施主に勧めるだけでなく、自身もスタッフと共に田畑を耕し、収穫の喜びを分かち合いたい。その他でいうと、自分も含めたスタッフとその家族が、子育てを両立できる働き方を積極的に取り入れていきたい。そのためには、仕事の高効率化・高収入は必要不可欠であり、容易なことではない事は十分承知している。しかし、このような取り組みが、新たな働き方として波及し、地球環境問題や少子化問題など、現代社会が抱えている諸問題解決の小さな一助となれば、

とても素敵なことだと思う。

■分野を越えたコラボレーションの重要性

前述したような新しい働き方を実行していく上では、あれもこれも全て自分達でやろうとすると無駄が多いし、負荷も相当かかってしまう。したがって、多分野・他業種の人達との意見交換や協働が不可欠であると考えている。理想的には、メンバー各々が「社会貢献」というゴールにスクラムを組んで向かっていくようなイメージだ。

これまでサービス業などの第三次産業が人気で、流通するお金も大きいので、経済の中核を担ってきたようなところがある。しかし、これからの時代は第一・二次産業といった実際の資源とそれに伴うものづくりの価値を見直していくことが肝要ではないかと、資本主義・貨幣主義一辺倒だった現代社会を眺め常々思う。いくら技術が進歩しようが、人間には衣食住を支える資源が必要なのである。以前私が農に興味を持ち始め、家族と共に京都府綾部の古民家へ移住し、見よう見まねで畑を始めたのは、日本の食料自給率が海外諸国と比較してもずば抜けて低いことを知ったことがきっかけだった。

■来たる新しい時代へ向けて

これから先数年後でさえ、何が起ころるか誰も予想できないような激動の時代、多くの人々がこの潮流を感じ取り、様々な試みを始めているのを見聞きするが、私も建築設計という職能をもって切磋琢磨できる今生に対し、とてもやりがいを感じている。道を切り開くのは決して容易いことではないことは承知している。それでも挑戦し続けたいと思う。

(さわ ひでとし)



写真5 飛騨高山の事務所からの風景

もしも建築学という分野がなかったら

—35年間の教員生活を
ふりかえる—

吉村英祐

大阪工業大学
教授

吉村英祐

1955年大阪生まれ。

1978年大阪大学工学部建築工学科卒業、1980年同大学院建築工学専攻修了。

小河建築設計事務所、大阪大学助手、助教授を経て2007年から大阪工業大学工学部建築学科教授。

1992年日本建築学会奨励賞、2007年日本建築学会賞（論文）受賞。博士（工学）、一級建築士。専門は建築計画学、建築人間工学、安全計画。主要共著に建築計画1・2（鹿島出版会）、建築計画基礎（学芸出版社）、建築人間工学事典（彰国社）、阪神・淡路大震災における避難所の研究（大阪大学出版会）ほか多数。2007年4月より現職。

■はじめに

私が母校の研究室の助手に着任したのは、35年前の1983年8月16日である。以来、教育・研究、大学の運営等の本務を第一に、委嘱された外部の仕事、公職、自主的活動等で、多忙ながら充実した日々を過ごしてきた。

このたび、本稿の執筆依頼があったのを機に、今日に至るまでの経緯を振り返ることにした。なお、原稿依頼の趣旨を尊重しつつも、多少逸脱するかもしれないことを、あらかじめお許しいただきたい。

■建築に対する興味の萌芽

改めていつ頃から建築に興味を持ったのかを考えるにあたり、それを知るヒントが得られるかもしれないと思い、棚の奥にしまっていた小学校時代のノートを引き張り出してきた。いずれも板書を書き写したノートではなく、自分の好きなことをオムニバスに並べた自由研究的な内容である。

久々に目を通すと、当時の自分が何に関心があったかが見えてくる。全般に絵が多く描かれているが、特に多いのが「地図」（家の近所、通学路、旅行ルート、架空の地図など）である。他に「動植物」の姿図も多く、「断面図」（果物の切り口、潜水艦や鉄腕アトム内部構造図）もある。実は、この「好み」は、この年になっても変わっていない。「三つ子の魂百まで」とはよく言ったものである。また、残念ながら見つからなかったが、縦横に走る高速道路や巨大な「スモッグ吸取機」がある「未来の大阪」の想像図も描いていた（これは「鉄腕アトム」の影響が大きい）。

今回、ノートといっしょに、小学校時代に作った住宅の模型の写真が出てきた。内装や家具は言うまでもなく、引き違い窓やドアは可動、水洗トイレは蓋が開閉可など、かなり手の込んだもので、完成まで数か月かかったが、完成した時よりも少しずつできあがっていく過程のほうが楽しかった。こうしてみると、小学校の頃にすでに建築に対してかなり興味を抱いていたことがうかがえる。

また、当時は実家の裏に父が経営している会社の工場があり、子どもの頃はプレス機械や旋盤が動き、グラインダーが火花を散らす中を走り回っていた（今ならもちろんNG）。

そこで鉄板や鋼棒が加工され製品になっていくようすを日々目にしていたことが、ものづくりへの強い興味につながったのは、間違いない。

■大阪万博（EXPO'70）の影響

1970年、千里丘陵で大阪万博が開催された。当時、私は中学3年生であったが、受験勉強から逃げるように、すっかり万博にはまってしまった。初めて会場に向かう電車の窓から、朝日を浴びて輝く「太陽の塔」が見えた時の感動は、今も忘れられない。会場に通ったのは三度だけであったが、朝一番から最終まで会場をひたすら巡った。会場では、パヴィリオンの奇抜な造形に驚き、またそれを実現する建築技術のすばらしさを子どもなりに理解し、ますます万博にはまっていった。1年後の高校1年生のときには、大学で建築を学ぼうとぼぼ心に決めていたのは、自然な成り行きであったが、その数年後に毎日のように「太陽の塔」を見ることになろうとは、当時は想像もしていなかった。

■恩師との出会い

私の恩師をあげるとすれば、まず小学校時代の3人の担任の先生である。どの先生にも私の個性を大切にしていたが、特に3・4年生の担任であった植村正信先生に、自由ノートに赤ペンで一言添えていただいたことは、大きな励みになった。

やがて大学受験を迎えたが、希望大学・学科の前年の競争率が7.2倍と知り、浪人覚悟で受験勉強を始めたその年の秋にオイルショックと狂乱物価に遭遇し、建築の将来が見えなくなったためか、希望学科の競争率がダウンし、何とか大学にもぐり込んだ。大学では、課外活動にも積極的に取り組むなど、たいへん充実した3年間を過ごした。4年生になって、希望通り岡田光正教授（現・大阪大学名誉教授）が率いられる「建築人間工学講座」（岡田研究室）に配属され、在籍した3年間に岡田先生の薫陶を受けたことが、その後の私の進路を決定づけた。卒業論文では、岡田先生をはじめ、当時助手でおられた柏原士郎先生（現・大阪大学名誉教授）、辻正矩先生（現・大阪工業大学名誉教授）、当時大学院生

であった鈴木克彦先生（現・京都工芸繊維大学教授）に、たいへん世話になった。修士論文は、吉田勝行先生（現・大阪大学名誉教授）にもご指導いただき、「地下街の火災による人的被害の推定とその安全化に関する研究」としてまとめあげたが、梅田地下街で火災が発生すれば最悪2,700人が亡くなるという衝撃的なシミュレーション結果になったため、学会発表を控えることになった。

ところが、大学院を修了した1980年の8月16日に静岡駅前地下街で爆発事故が発生し、多数の死傷者が出たことを受けて、岡田教授が急きょ記者会見で私の修士論文の結果を発表され、全国紙数紙に大きく掲載された（写真1）。そこに書かれている数字は、まさしく修士論文の結果そのものであり、自分の研究が社会に発表されることに対する責任の重大さを感じるとともに、研究者という職業により強く惹かれる契機となった。



写真1 岡田教授（右下）が梅田地下街での避難シミュレーション結果をプレス発表（サンケイ新聞 1980.8.17）

■設計事務所時代

大学院では研究に没頭したが、博士後期課程への進学はまったく念頭になく、設計をしたいという思いで、就職活動では設計事務所

を探していた。折しも1979年に第二次オイルショックが日本経済を直撃したが、幸い小河建築設計事務所に就職し、在籍中は事務所ビル、学校、集会所、工場、倉庫などの設計を担当し、建築会館のコンペ応募、防災計画書の作成、開発申請なども経験した。

設計事務所では、多くの先輩方にご指導いただいたが、この時の経験が後の大学教員としての社会の関わり方に大きく影響するとともに、大学と社会の関係性を考えるうえで大いに役立った。ちなみに、大阪府建築士会前会長の柳川陽文氏は、小河建築設計事務所時代の直属の上司である。

■再び大学へ

就職してほぼ3年が経った1983年の3月に、岡田教授から助手として戻らないかとの打診をいただいた。その頃は、少しずつ仕事を任されるようになっていたため、もう少し続けたい気持ちもあったが、母校に戻る機会は二度とないと思い、思い切って設計部長に相談した。ところが（私にとって）幸いなことに、設計部長は岡田先生の前任校での教え子であったため、「岡田先生からの依頼なら仕方がない」と、何とか円満退社することができた。ただし、岡田先生は6月1日着任を希望、会社側は秋まで待ってほしいということで、着任日は中をとった形で8月16日になったが、この日は奇しくも静岡駅前地下街爆発事故が発生してから、ちょうど3年目であった。

こうして、再び岡田先生にご指導いただくことになったが、今回は教授－助手の関係であり、甘えは許されない。だが、岡田研究室は、助手の立場としてもきわめて快適な環境であった。この環境は岡田先生が退官され、柏原士郎先生が教授になられても引き継がれ、自由闊達な雰囲気や研究に没頭できた。私は2007年に大阪工業大学に移ったが、岡田研究室のDNAは吉村研究室が引き継いでいると自負している。

■ようやく本題

書き始める前に危惧したとおり、脱線が過ぎた。執筆依頼の設問への回答をもって、本稿の終わりとした。

○仕事をする上で「これだけは譲れない考え」や「ポリシー」

研究者としての社会的役割と倫理観を大切にし、忘れないこと。今は評価されないが、いずれ必要とされる「役立たない研究」と「無意味な研究」を峻別し、限られた時間と研究費を有効に使うこと。

○「いまの仕事を選んだ理由、そのもととなっている、仕事の魅力」

すでに書いたことに加え、研究を通して学生を教育し、育てることも大きな魅力である。学生に教えることよりも教わることのほうが多い。教育と研究は表裏一体である。

○仕事をするうえで影響を受けた人物や作品

当然、上記の恩師。建築家であれば、丹下健三氏。影響を受けた作品は数知れないが、建築に興味を持つ決定的な契機となった「大阪万博」と、大学時代に実物を見て感動した「国立屋内総合競技場」を挙げたい。

○仕事をしていて、社会との繋がりを感じることはあるか

建築ほど社会と密接につながる分野はない。社会は研究のフィールドであり、シーズの宝庫である。社会への関心が薄い教員は、「無意味な研究」しかできないであろう。

○世間で言われている「働き方改革」について、身近なエリア・属されている組織等でのような状況か

大学にも職務規程があるが、本務をしっかりこなすことを前提に、それ以外の時間の使い方は相当自由である。だが自由には責任が伴う。大学人としての評価は、この「自由時間」をどう使うかに大きくかわっている。なお、個人的には慢性的に時間が足らず、長時間勤務が続いているが、社会的使命感と充実感、そして「自由時間」の存在が精神的な支えとなっている（健康には注意している）。

○もし、人生をやり直せるとしたら、やはり同じ仕事を選択されますか

ためらいなく「はい」と答えるであろう。もしも、建築学という学問分野がなかったら、大学教員という職業がなかったら、私は今頃どこで何をしているであろうか、想像がつかない。建築に、学生に、そして今まで私を支えてくれた家族に感謝。

（よしむら ひでまさ）

伝建条例を制定

～神戸市北野町山本通 伝統的建造物群保存地区～

鈴木瑤子
神戸市住宅都市局建築指導部建築安全課指導係

はじめに

神戸市北野町山本通伝統的建造物群保存地区（以下「北野町山本通地区」という。）は、歴史的に重要な建築物や門・塀などを「伝統的建造物」に、また、伝統的建造物と一体のものとして特に保存が必要と認められる石垣等を「必要物件」に認定している（以下「伝統的建造物等」という。）。特に伝統的建造物は、その外観を維持するため、復元及び現状維持するものとしているが、現行の建築基準法（以下「法」という。）に適合しないものが多く、それらに関して建築行為を行う場合には、現行法が適用され保存し続けることが困難となっている。

そのため、法第85条の3の規定に基づき、「神戸市北野町山本通伝統的建造物群保存地区における建築基準法の制限の緩和に関する条例（以下「伝建条例」という。）」を制定した。

伝建条例の概要

■緩和の対象及び行為

法の制限の緩和の対象は、①伝統的建造物等②伝統的建造物のある敷地における門・塀や擁壁とする（伝統的建造物以外の建築物については現行法適用）。北野町山本通地区については、他の伝建地区に比べ地区内に伝統的建造物が点在していることから、緩和の対象を伝統的建造物等の敷地に限っている。

また、伝統的建造物等のある敷地は、伝統的建造物以外の門・塀も混在する場合が多いため、景観の観点などから、伝統的建造物以外の門・塀や擁壁についても法の制限を緩和する場合がある。例えば、法第42条第2項に該当する道路に接する敷地に伝統的建造物以外の塀があり、そのセットバックにより伝統的建造物等を壊す可能性がある場合等は、伝統的建造物以外の塀についても法の制限を緩和する。ただし、緩和対象条項は、法第44条のみとする（図1）。

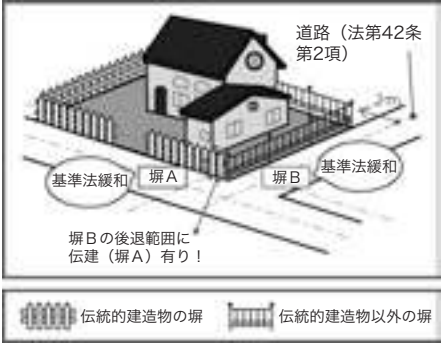


図1 伝建以外の塀が緩和される場合の例

緩和の対象とする行為は、「新築・増築・改築・大規模の修繕・大規模の模様替」とする。伝統的建造物等においては、一度解体し、その部材を用いて復元することがあるが、このケースが「新築」と判断される場合があるため、緩和の対象に「新築」を含めている。

■緩和の対象とする法の条項とその要件

緩和の対象とする法の条項は、北野町山本通地区内の伝統的建造物等の既存不適格条項（法第21条、第44条、第53条、第56条、第62条第1項・第2項、第64条）とする。

法の制限を緩和するためには、「①代替の安全対策」（抵触する条項ごとに設置）と「②消防用設備等の設置」（必須）が必要である。

「①代替の安全対策」は、法の条項により、安全上及び防火上必要となる措置を規定している（表1）。特に、道路内の建築制限（法第44条）に抵触する場合は、消防活動上の道

法の 緩和対象条項	代替の安全対策 (例示)
大規模な建築物の 主要構造物の制限 (法第21条)	各居室にスプリンクラー 設備等を設け、外壁及び 軒裏の仕上げを不燃認定 木材にする
道路内の建築制限 (法第44条)	●外壁、軒裏、屋根及び 外部に面した柱、梁を 準耐火構造とする ●住宅以外の建物（例： 飲食店）には厨房にス プリンクラー設備等を 設ける
準防火地域内の 建築物の構造制限 (法第62条第1項)	外壁及び軒裏の仕上げを 不燃認定木材にする
準防火地域内の 木造建築物等の 外壁等の防火措置 (法第62条第2項)	門の仕上げを金属板の上 に厚さ12mm以上の木 材を張ったものにする
これに付属する 門・塀の不燃化 (法第62条第2項)	窓の建具を不燃認定木材 とし、ガラスを網入ガラ スとする
外壁開口部への 防火戸の設置 (法第64条)	
建蔽率の制限 (法第53条)	(現状非悪化とする)
建築物の各部分の 高さの制限 (法第56条)	

表1 法の緩和対象条項と代替の安全対策例

路空間が確保できない状況となることから、法の求める耐火性能以上の代替の安全対策を規定している。また、条項により、代替の安全対策を複数設定し、選択式としている。ただし、法第53条及び第56条については現状非悪化とし、代替の安全対策は規定していない。

「②消防用設備等の設置」は、連動型住宅用防災警報器をはじめとした住宅用防災警報器など及び消火器の設置を規定しており、これらの設置については法の制限を緩和する場合の必須条件としている。

「①代替の安全対策」により、安全上及び防火上必要な措置を確保し、「②消防用設備等の設置」により、早期発見・初期消火を可能にしようとするものである。

例えば、法第44条のみに抵触する住宅の場合、壁・軒裏等のみを準耐火構造とし、居室等に連動型住宅用防災警報器及び消火器を設置し、市長の認定を得ることで、法第44条の制限を緩和することができる（図2）。

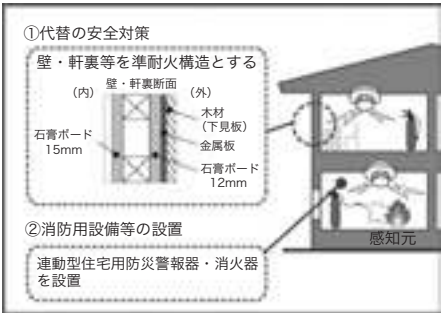


図2 代替の安全対策の例

■その他の規定

北野町山本通地区内の伝統的建造物等は、多様性があることから、伝建条例で規定した代替の安全対策の他、それと同等の性能を有する措置を個別に許可する制度も設けている。

また、例えば門・塀や小規模な付属棟のみ改築等する場合、法の集団規定は敷地内遡及適用となるが、「②消防用設備等の先行設置」を条件に、伝統的建造物本体への「①代替の安全対策」を一時猶予する。このことにより、所有者は経済的負担を分散することができる。

おわりに

伝統的建造物等の中には、建築より100年を越すものもあり、今後、次々に更新の時期を迎えることが予想される。伝建条例により、伝統的建造物等がその姿を保ちながら、現状より安全な建物へと更新されることを期待している。（すずき ようこ）

●鈴木瑤子
2009年京都工芸繊維大学大学院博士前期課程修了。2009年神戸市入庁。

最新リモコン事情

～温水洗浄便座

山中章己

TOTO株式会社
エレクトロニクス技術本部
電子機器開発第二部 技術主幹 兼
電子機器研究開発G グループリーダー

1. はじめに

今や生活の必需品とも言われるようになった温水洗浄便座ウォシュレット（※）は今から約40年前となる1980年に誕生した。80年代後半から90年代前半は、多くの機能がウォシュレットに盛り込まれていき、1987年にはウォシュレットと便器が一体化した「ウォシュレットQUEEN」が発売された。（図1）

従来、ウォシュレットの操作装置は便座の袖部に設置されていた。「ウォシュレットQUEEN」に搭載されたウォシュレット初のリモコンは、使用者の押しやすさを考慮したワイヤレスリモコンである。赤外線通信を用いた遠隔操作により操作部をウォシュレット本体から離して壁側に設置することが可能となり、袖部の出っ張りを無くして清掃性を向上させると共に、より快適な姿勢で操作できる事を実現した。



図1 ウォシュレットQUEEN

2. お客様ニーズの多様化

その後、TOTOの遠隔操作の通信技術はお客様視点で進化させていった。

使用者視点では「リモコンやウォシュレットを新しく購入されても従来機能が使えるように、ウォシュレットの通信仕様を過去の全機種に対応させること（互換性）」や「意に反してリモコンの洗浄ボタンを押した場合でも確実に動作停止できるよう、安全状態を最優

先して“止”信号の通信性能を最も高めること」、「2つ以上連立する便房にウォシュレットを設置する場合、ウォシュレットが隣のリモコン操作で誤作動することを防ぐこと（連立ブースでの混信防止）」、管理者視点では「近づいた時に自動で便ふたのみが開く仕様がデフォルトだが、一方で便ふたと便座の双方を同時に開く仕様を求められるお客様もいらっしゃるため、ご要望に応じて初期設定の動作仕様を管理者が変更可能とすること（お客様設定モード）」、などが挙げられる。

3. 更なるニーズへの対応

TOTOは、お客様ニーズの多様化は益々加速すると予測し、赤外線通信技術の代替となる電波通信技術に着目した。

トイレ空間における電波通信の魅力は、①障害物の影響を受け難く通信性能が高いこと、②低消費電力（赤外線1/100以下）であることにより電池サイズの小型化に寄与し、結果的にリモコンがコンパクトになること、③電波は樹脂や陶器などを透過するため隠蔽でき、赤外線通信に必要な黒窓が不要となりデザインの自由度が広がること、が挙げられる。

早期段階から技術蓄積を行ってきた成果として、2008年には温水洗浄便座として国内で初めて電波通信リモコンの発売に至った。（図2）



図2 ホテル向ウォシュレットワイヤレスリモコン

4. エコリモコン（※）の誕生

駅舎やデパートなどのパブリックトイレのリモコンに対するお客様のご要望として、省施工性と省管理性の両立が強く求められていたが、従来は“電源工事が不要だが電池交換が必要な電池式リモコン”または“電源工事が不要だが電源工事が必要な電源式リモコン”の二者択一であった。そこで、電源工事不要・電池交換不要のリモコンを実現すべく、ボタンを押す力で発電し、1回の押し動作で通信エネルギーを賄える電池レスリモコン（エコリモコン）の開発に着手した。（図3）

不特定多数の方々が利用するパブリックトイレでは、押す力の弱い方でも確実に押せる操作性と耐久性を実現すること、使用者のご要望を満たす操作ボタン数（9個）を公共トイレ操作系JISに対応した所定のサイズに収めることが求められた。そこで、操作性においては、ボタンの下側に厚く膨らみをもたせた「ピアノキーボタン形状」を採用し、指先や手

の甲などでも小さな操作力でしっかり押し込めるUD（ユニバーサルデザイン）性を実現した。また、発電機は収納性と経済性を考慮して1台とし、どのボタンを押しても同じ操作感で発電機に確実に力が伝わる伝達機構を技術開発することで、リモコンを所定のサイズに収めた。（図4）



図3 エコリモコン

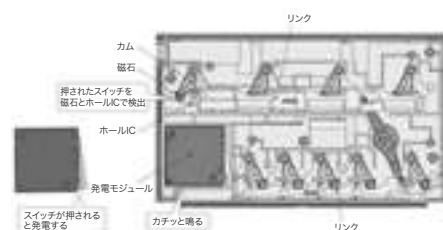


図4 内部構造

5. 今後の展望

世の中が豊かになる一方で、タブレットやスマートフォンの台頭と同様に、水まわり機器のインターフェースに対してもお客様ニーズが更に多様化することは明白である。昨今、注目されているAIスピーカもTOTOは通過点と捉えており、技術開発を怠らず、常にお客様ニーズに応えられるマン・マシン・インターフェースの技術蓄積と価値創造に尽力していきたい。

6. おわりに

今回の執筆にあたり改めてウォシュレットリモコンの進化を整理することが出来ました。関係各署の皆様へ感謝申し上げます。

※「ウォシュレット」「エコリモコン」はTOTOの登録商標です。

（やまなか まさみ）

●山中章己

1991年 東陶機器（現TOTO）株式会社 入社
商品開発本部 制御開発課に配属
2011年 総合研究所
電子・制御研究グループ
2013年 エレクトロニクス技術本部
電子機器研究開発グループ

職務内容

TOTOの電気応用商品の新商品開発業務を一貫して担当。主に、リモコン、センサ、コントローラの研究開発に従事。

▶「MOK2018」第23期生 募集要項

MOKスクール大阪は、阪神淡路大震災を契機に木造を根本から学びなおす社会人向けの学校として1996年に開校し、今年で23年目を迎える。「木」をキーワードに、第一線で活躍する講師陣による全7回、20講座。共に学ぶ仲間を広く募集している。

■受講資格

設計者、施工者、林業家、製材業者、役所や企業の建築担当者等、木造住宅に携わる人、建築を志す学生など

■2018年度 講師（予定・敬称略）

益子義弘・楢村徹・伊礼智・小泉雅生・山辺豊彦・南雄三・上野英二・速水亨・佐藤実・岸上勝彦・安井昇・佐藤孝浩・中山大輔・光嶋裕介・辻充孝・木村敏・小泉宙生・金山大・木又誠次・三澤文子

■期間

- 2018年度 開講日 2018年4月21日(土)
- 講義：4月～12月（4/21・6/9・7/14・8/4・9/8・10/13・12/8）
13時30分～18時30分（1講座90分）
- フィールドゼミ
5/19（奈良県吉野）、11/10・11（石川・金沢）
※フィールドゼミの参加費用は別途必要

■会場

大阪工業技術専門学校 5・6号館（大阪市北区天満1-8-24）

■定員

40名（申込み先着順 定員になり次第締切り）

■募集期間

随時受付中

■参加費

MOKスクール受講費
個人：年間7万円 学割：年間5万円 法人：年間10万円
（次年からの更新費 個人：年間1万8千円 法人：年間3万円）

■申込み・問合せ

MOKスクール大阪 事務局 西久保（にしくぼ）・前川
大阪市福島区福島2丁目9-15
Tel.06-6831-5999（有）MOK fax.06-6940-7708
e-mail info@mokosaka.jp
URL http://www.mokosaka.jp/
※上記内容は変更となる場合あり

1 特別展「小磯良平と吉原治良」

小磯良平（1903－1988）と吉原治良（1905－1972）は、ともに戦前から戦中、そして戦後にわたって阪神間を主な拠点として活躍した画家である。

小磯は東京美術学校を卒業後渡欧し、アカデミックな西洋美術の正統な継承者をめざし、官展や新制作派協会にて類いまれなデッサン力を駆使した珠玉の人物画を数多く制作・発表し、日本を代表する具象絵画の巨匠として活躍してきた。

一方の吉原は、家業である製油会社を経営しつつ、ほぼ独学で絵画の技法を習得し、戦前の海外の抽象絵画に影響を受けた前衛的な作品を二科会の九室会で発表、戦後は日本の前衛美術を代表する具体美術協会の主宰者として数多くの抽象絵画を手がけた。このようにほぼ同時代を地理的にきわめて近い位置において制作してきたにもかかわらず、彼らを同時に評価する機会はほとんどなかった。

しかし「同時代性」と「地域性」に着目してみると、小磯と吉原にはまったく対照的であると同時に類似性も認められる。ともに西洋美術に自らの創作の規範を求め、それを極限にまで推し進めることで同時代の日本の美術界に大きな影響力を与えたこと、戦後には、片や母校の東京芸術大学で、片や具体美術協会を中心とした組織で優秀な後進を数多く輩出したこと、また戦後にともに舞台美術を手がけたことなど、その画業には何かしらの共通点がある。

この展覧会は阪神間の生んだこのふたりのモダニストの足跡を、代表作を時代毎に「並置」することで、その対照性と類似性を明らかにしつつ、それぞれの画業を再確認するものである。



小磯良平《自画像》1927年
油彩・布 東京藝術大学蔵

- 期 間 5月27日(日)まで
10：00～18：00（会期中の金・土曜日は20：00まで）
※入場は閉館の30分前まで
- 休 館 日 月曜日（ただし4/30は開館、5/1は休館）
- 会 場 兵庫県立美術館
神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
TEL.078-262-0901（代表）
- 観 覧 料 一般1,300円、大学生900円、70歳以上650円
*高校生以下無料
*障がい者手帳等をお持ちの方（70歳以上を除く）は半額、その介助者1名は無料

2

特別展「江戸の戯画
—鳥羽絵から北斎・国芳・暁斎まで—

太平の世が続いた江戸時代には、多くの戯画が描かれた。一口に戯画といっても多種多様なものがあるが、本展では「鳥羽絵」をキーワードに江戸時代の戯画を紹介する。

鳥羽絵は、広く戯画や漫画を指す言葉として使われることもあるが、より限られた意味では、18世紀に大坂を中心に流行した軽妙な筆致の戯画を指す。そこに描かれる人物は、目が小さく、鼻が低く、口が大きく、極端に手足が細長いという特徴を持ち、その名は



葛飾北斎
「鳥羽絵集會 お稽古」
ベルギー王立美術歴史博物館蔵
(通期展示)

国宝「鳥獣人物戯画」の筆者と伝えられてきた鳥羽僧正覚猷に由来するものとされる。

鳥羽絵は、18世紀の大坂で鳥羽絵本として出版され、その人気は近代にまで及んだ。また、上方に留まらず、江戸の浮世絵などにも影響を与えている。鳥羽絵を洗練させたとされる大坂の「耳鳥斎」はもちろん、鳥羽絵本の影響を受けたと考えられる江戸の「北斎」や「国芳」、そしてその流れをくむ「暁斎」など、時代や地域により変化しながらも、笑いの感覚は脈々と受け継がれてきた。

本展では、そのような流れを追いつつ江戸時代の戯画のエッセンスを展覧する。また、歌川国芳の「金魚づくし」シリーズ全9点がそろうのも見どころの一つである（前期のみ）。笑いを文化として発展させてきた大阪の地で、多彩な笑いの世界を紹介する。（出品予定作品：約280件）

期 間 4月17日(火)～6月10日(日)

前期：4/17～5/13 後期：5/15～6/10

※会期中展示替えあり

9：30～17：00

※入館は16：30まで

休 館 日 月曜日（ただし4/30は開館）※5/1も開館

※災害などにより臨時で休館となる場合あり

会 場 大阪市立美術館

大阪市天王寺区茶臼山町1-82（天王寺公園内）

TEL.06-4301-7285（大阪市総合コールセンター）

観 覧 料 一般1,400円、高大生1,000円

*中学生以下無料

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

3

プーシキン美術館展
—旅するフランス風景画—

珠玉のフランス絵画コレクションで知られるモスクワのプーシキン美術館から、17世紀から20世紀の風景画65点が来日する。神話の物語や古代への憧憬、あるいは身近な自然や大都市パリの喧騒、果ては想像の世界に至るまで、描かれた時代と場所を軸にフランス近代風景画の流れを紹介する。

なかでも、初来日となるモネの《草上の昼食》では、同時代の人物たちとみずみずしい自然の風景が見事に調和している。印象派の誕生前夜、26歳となる若きモネの魅力溢れる作品である。ほかにもロラン、プーシェ、コロー、ルノワール、セザンヌ、ゴーガン、ルソーらの作品が集う。



クロード・モネ《草上の昼食》1866年
© The Pushkin State Museum of Fine Arts, Moscow.

期 間 4月14日(土)～7月8日(日)

9：30～17：30（金曜日は20：00まで）

※入室は閉室の30分前まで

休 室 日 月曜日（ただし4/30は開室）

会 場 東京都美術館 企画展示室（東京・上野公園）

東京都台東区上野公園8-36

TEL.03-5777-8600（ハローダイヤル）

観 覧 料 一般1,600円、大学・専門学校生1,300円

高校生800円、65歳以上1,000円

*中学生以下無料

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

*4/18、5/16、6/20はシルバーデーにより、65歳以上の方は無料（要証明）

*毎月第3土・翌日曜日は家族ふれあいの日により、18歳未満の子を同伴する保護者（都内在住、2名まで）は一般料金の半額（要証明）

本欄掲載の1～3の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（82円）を日本建築協会事務局までお送りください。

理事会

第7回常任理事会

2月28日(水) 16:00~17:30

日本建築協会会議室

出席者 設楽会長ほか8名

議 事 (1) 平成30年度役員、評議員の推薦、依頼

(2) 6月総会講演会の講師の候補者

(3) 未来創生プロジェクトの経緯

(4) 「建築と社会」アーカイブ化の経過

(5) 大阪府住まいまちづくり教育普及協議会(出前口座)の経費負担

(6) 第1回「片岡安賞」の公開プレゼンテーションタイムスケジュール等

(7) 史料研究会の位置づけ

(8) プロのノウハウ新刊発刊報告

編集委員会

第11回広告企画・編集合同委員会

2月28日(水) 18:00~18:30

日本建築協会会議室

出席者 勝山委員長ほか2名

議 事 (1) 3月号特集 東海支部特集

(2) 4月号特集 働き方と価値：社会に繋がる多様なワークスタイル

(3) 5月号特集 スポーツイベントを支える設備技術(仮)

(4) 6月号特集 「片岡安賞」入賞発表

(5) その他

2018年4月特集号第5回特別編集委員会

2月28日(水) 18:30~20:30

日本建築協会会議室

出席者 勝山委員長ほか6名

議 事 (1) 座談会

第3回建築計画系分科会

2月23日(金) 19:00~21:25

日本建築協会会議室

出席者 桑原幹事ほか3名

議 事 (1) 2018年特集について

第8回構造分科会

2月2日(金) 18:30~19:15

日本建築協会会議室

出席者 伊藤幹事ほか2名

議 事 (1) 構造の頁の企画

(2) 2018年特集の企画

第10回設備分科会

2月7日(水) 18:00~19:00

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか3名

議 事 (1) 2018年特集の企画

(2) 「設備の頁」の企画

第5回施工材料分科会

2月20日(火) 17:00~18:05

日本建築協会会議室

出席者 高橋幹事ほか4名

議 事 (1) 2018年特集の企画

第9回法令分科会

2月21日(水) 16:00~17:20

日本建築協会会議室

出席者 小林幹事ほか5名

議 事 (1) 法令コーナーの企画

(2) 2018年特集の企画

第10回作品作風小委員会

2月22日(木) 19:00~19:45

日本建築協会会議室

出席者 加嶋小委員長ほか2名

議 事 (1) 作品の選定

(2) 作品の掲載状況、予定の報告

(3) gallery掲載報告、予定

(4) その他

次世代委員会

第5回2040委員会

2月19日(月) 19:30~21:00

日本建築協会会議室

出席者 駒井リーダーほか3名

議 事 (1) 企画内容

(2) 今後の委員会活動

第13回U-35小委員会

2月9日(金) 19:00~

大建設会議室

出席者 三谷リーダーほか9名

議 事 (1) 活動/予定

(2) 次回予定/その他

第6回建築次世代委員会

2月16日(金) 18:30~20:00

日本建築協会会議室

出席者 菅原幸也委員長ほか4名

議 事 (1) 現場見学会の見学先について

(2) 日本建築協会 新パンフレット作成の件

出版委員会

第10回出版委員会

2月27日(火) 18:00~19:00

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか6名

議 事 (1) 既刊書籍経過報告

(2) 制作進行中の書籍

(3) 今後の出版テーマ

(4) 既刊書籍を用いた講習会の企画

教育委員会

第3回工高生教育小委員会

2月9日(金) 18:00~19:30

日本建築協会会議室

出席者 谷口委員長ほか3名

議 事 (1) 第64回工高生デザインコンクール募集規定検討

(2) 今後の予定・日程等

(3) 委員増員について

大阪府住まい・まちづくり普及協議会全体会議

2月16日(金) 10:30~12:00

大阪建築会館会議室

報告・議題

(1) 出前講座

(2) マニュアル作り

(3) その他

・助成金

編集委員会(平成30年度)

■副会長

米井 寛

本多 友常

■編集担当理事

◎勝山 太郎

佐藤 榮一

杉本 浩

竹中 統一

西 博康

松崎 公一

船越 淳久

吉村 英祐

香西喜八郎

■副委員長

○戸川 勝之

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

松田奈緒子

守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

神戸 嘉也

△桑原 悠樹

下坂 浩和

中辻 浩介

東 拓郎

樋口 展寛

松岡 英緯

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

★インテリア・住宅系

赤川貴世友

今井 充彦

岩田 圭司

川合 隆之

河西 孝平

△黒柳 亮

塚口 洋之

ペリー史子

■構造分科会

伊藤 栄治

岡田 健

岸本 光平

瀧野 敦夫

△角田 耕一

穂原 学

前沢 皓生

宮久保秀樹

向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎

木谷 晃之

北野 勝也

佐々木章二

寺井 千佳

夏井 重行

△橋本 直樹

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

森山 正和

山本 雅洋

■施工材料分科会

東 琢

桜井 和男

△高橋 秀一

藤丸 啓一

山口 紀宏

山崎 順二

吉田 正友

吉居 哲

■法令分科会

磯林 雅之

黒川 正樹

河野 学

小林 智成

△武田 知士

■作品作風小委員会

▲東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

太田 栄治

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉渕奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

鞆野 淳司

西田 佳代

芳谷 晴彦

平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画小委員会

小川 雄介

金築 雄

小山 昭

野山 将男

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2018年3月28日

発行 2018年4月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪府中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 ㈱中島弘文堂印刷所

定価 1230円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://naci.jp> E-mail: nci@naci.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市里池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目4-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 E-mail：koukoku@aj.or.jp

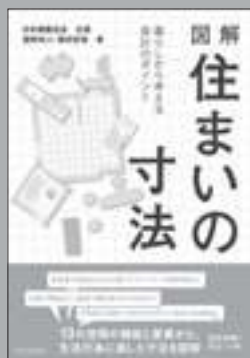
◆ 第1回 建築セミナー ◆

主催：日本建築協会出版委員会 共催：学芸出版社

日本建築協会は、「建築の本」の著者をお招きし、手軽にご参加いただける連続セミナーを今年から開催します。第1回として日本建築協会企画『図解住まいの寸法』の出版を記念して実施いたします。お気軽にご参加ください。

「暮らし」から考える 住まいの寸法入門講座

講師：堀野和人 氏 一級建築士事務所スマイルズム。



住宅の設計には、そこに住む人の暮らしをふまえた寸法への理解が欠かせません。

『図解住まいの寸法』では、玄関、階段、トイレ、洗面室など、住まいの13の空間の持つ機能と要素を整理し、そこで行われる生活行為に支障のない、理に適った寸法をイラストで紹介しました。寸法という数字の持つ意味を知り、設計に活かす方法をお伝えしたいと思います。

〈講師プロフィール〉

堀野 和人 (ほりの かずと)

1965年大阪府生まれ。ゼネコン、ハウスメーカー設計室勤務を経て、一級建築士事務所スマイルズム、を設立。一級建築士、一級建築施工管理技士。

このセミナーは、建築 CPD 情報提供制度認定プログラムです。建築関連 CPD (2単位)

日時：2018年5月16日(水)
18:00 ~ 20:00 (17:45 開場)

場所：TOTOテクニカルセンター大阪
大阪市中央区久太郎町3-6-8御堂筋ダイワビル2階 地下鉄本町駅から徒歩4分

参加費：テキスト購入+受講4000円
受講のみ1500円 (※日本建築協会会員と学生はテキスト購入+受講3500円、受講のみ1000円)

定員：50名

使用テキスト：堀野和人・黒田史香 著『図解住まいの寸法』
A5判・200頁・本体2600円+税

※当日はテキストを税込2808円⇒税込特価2500円で販売します。

【申込み方法】

下記を記載の上、メールもしくはFAXにてお申込ください。

①催し名(第1回建築セミナー) ②氏名(ふりがな) ③所属 ④会員・一般・学生の別 ⑤当日の書籍購入希望の有無 ⑥受講票郵送先住所 ⑦電話番号 ⑧E-mail アドレス ⑨CPDを申請される方は申請先団体名と番号
申込先：(一社)日本建築協会 TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984
E-mail:hensyu2@aaj.or.jp(担当：入谷)

